

第2章 インタビュー報告

HOW TO INTERVIEW

インタビューに至るまでの下準備

私たちは実際にインタビューするに至るまでに次のような段取りで事を進めていった。

- ①インタビューする相手と、インタビューの日程を相手の都合の付く日に決める
(約2, 3週間前)
- ②その日まで各自インタビュー項目（いかにして私たちの研究に有意義な答えが引き出せるか、あるいはいかにして相手の琴線に触れることができるか）を熟考する
- ③参考資料（『放送ハンドブック=文化をになう民放の業務知識=』、『Audio Visual 時代のサウンドミクシング』等）を読んで、放送局（特にラジオ局）についての知識を、多少なりとも得て、実際のインタビューに備える
- ④インタビュー当日は、約束の時間2時間前に、徳島大学総合科学部の社会調査室に集合し（K先生も同席）、それぞれが持ち寄ったインタビュー項目を議論して有意義なものだけを採用する
- ⑤インタビュー経過を終始カセットレコーダーに録音するため、本番で失敗のないよう試し取りを行う（マイクを向ける方向、操作の仕方などに注意）
- ⑥約束の時間数分前にABC（仮）に到着し、受付で interviewee を呼んでもらう（“いざ出陣の心意気を忘れずに”）

私たちがインタビューをするにあたって、相手の方に失礼にあたることのないようにというのはいうまでもなく、一番気をつけたことは、安易すぎる質問は避けるということであった。このことには非常に苦勞した。また、この時、K先生の意見は大変参考となった。インタビューしていく上で重要なことは、相手の琴線に触れ、相手がこれはぜひとも話したい、話し続けたい、という気持ちになるようもっていくことであって、どんなインタビュー項目にすれば相手がそういうふうになってくれるか、私たちなりに懸命に考えた。以上のことがインタビューに至るまでの下準備である。

インタビューし終えてからの過程

- ①インタビューした直後、再び大学に戻ってきて、各自とったメモをインタビューに行った人数分（4人分）コピーして、それぞれ交換する
- ②テープにきちんと音が入っているかを確認して誤消却防止のツメをおる
- ③テープおこし（録音テープを聞いてそれを全部書き出す）{一人称一人語り方式}
{Q&A方式}
- ④書き出したものを、話のつながりや内容に合わせて編集
- ⑤ワープロ打ち
- ⑥研究会（読み合わせ）
- ⑦修正
- ⑧最終稿にコメント付け

interviewee の話をなるべくそのまま使った方がリアル感がでていいと思い、ほとんど一字一句違わずにテープから書き出すことは本当に時間がかかって大変だった。また、話の流れに合わせて編集するときに、どこをどういうふうにつなげれば話の流れとしてうまくいくかという点に苦勞した。以下のインタビュー記録は何度も何度も修正して、やっとできあがったものである。

*下記のインタビュー記録内で使われる（ ）は、担当者が補った言葉である。

I アナウンサーインタビュー

’ 97 / 6 / 11 ABC (仮) 食堂にて実施

Q 入社されたのは？

A 昭和55年です。

Q 入社試験はどのようなものだったんですか？

A 入社試験は、うーん、どっちが先だったんだっけなあ、あ、筆記試験が先だったと、うーんあの、一般職の人と一緒に受ける筆記試験という、ペーパーテストですね、一般常識の、それが午前中にありまして、で、お昼からアナウンサーだけは音声テストっていう、ま、テレビカメラの前で決められた原稿を読まされて、ま、それが1次テスト。で、日を改めてあのアナウンサーだけ2次の音声テスト。やっぱりフリートークとか、カメラを前にして、ま、いろんな質疑応答とか、えー適性テストをやらされて、最終の重役面接というパターンでしたね。

Q 何か練習はしましたか？

A うん、まあ、アナウンサーになる人っていうのは、たいがいの場合なんかそういう経験とかある人が多いんですが、まあ自分の場合も大学生の時に、放送研究会でやってたし、あと、あの東京の専門学校に、半年ぐらいですか、行きました。

Q 関東出身なんですか？

A いや広島です。大学が東京。

Q これまでどんな番組をされてきたんですか？

A もうねえ、18年目ですか、今。だからかなりいろんな種類の番組やってるから、一概に、一口に、言えないんですが。

Q ラジオでは？

A ええと一番最初にやったのは、今のお昼のワイド、みたいなのをいきなりやらされたんですが、それは長続きしなくて、あと夜のディスクジョッキー番組、ヤングスタジオっていう番組とか、どきどきステーションとか、若い時代は若い人を対象にした番組っていうのを結構やまして、それであと土曜フレッシュパトロール、土曜のワイドとか、あと日曜の午後にやってる演歌なつメロ日曜3時間、今はタイトル変わったけど、いきなりやらされて、で、サンデーウエーブとか、去年まで、あ、この春までは、はりきりワイドもやってました。

Q 自分で企画を持ったことは？

A うーんだからこのサンデーウエーブっていうのは、さっきのSアナウンサーあたりと最初企画を考えて、作り始めた番組なんですね。それからどきどきステーションという夜の、ま、生番組だったんですけど、長いときで2時間ちょっとぐらいあったのかな、それ

もあの制作的なことも全部自分たちでやってるような番組だった。

Q それはどういう番組だったんですか？

A まあ電話リクエストなんかもとったり、あと地元のタウン誌のみなさんと協力している企画を考えたりとか、ラジオドラマやったりとか、ま、いろんなバラエティー番組ですね。

Q 取材を自分でやったことは？

A うーん、ま、うちの場合はニュースは報道部が、直接は報道するんですが、なんか大事件があったときなんか、アナウンサーも一緒に行って取材したり、レポートしたり、やることはありますね。この前も、あの、ほら、中国人の密航者が県内にきたときに、行ってましたけどね。

Q ラジオ番組の中での、ラジオ特有のアクシデントはありますか？

A うーん、ラジオ特有のアクシデント、パニックはしょっちゅうなってますからねー、トラブル多いし、そんなのはしょっちゅう、電話が繋がらないとかね、相手がいなくてとかね、それからまあスタジオでしゃべっても音がでないっていうのは、ときどきありますね。生放送でしゃべってるのに音がでないとかね、うーん。あんまり記憶力がいい方じゃないんでね。

Q プロとして気をつけていることは？

A うーん、そうですねー、難しい質問だなー、なんで難しい、だいたいアナウンサーっていうのは、質問するのは得意だけど、受けるのは苦手なんですよねー。どっちかっていうとね。放送の場合ねー。これだけは気をつけよう、まあようするにあのー、聞いている人はもちろんなんですけど、一緒にいる人、を不快にさせるような発言をしないように、自分をいましめてるっていう。で、人によって、アナウンサーによっても違うんですけど、こう、タイプがあるんですよ。自分が目立ってこうガンといく人と、相手の良さを引き出すっていうタイプの人。僕はどっちかっていうと後者なんで、この相手の良さを引き出そうっていうことも、まあある程度考えながらやってるんですけどね。

Q 体調などには気を使っている？

A そうですねー、本当はあの、昔はね、カゼひいたっていったら怒られたらしいんですよ。だけどアナウンサーってせまいスタジオで、空気が汚いところで、ずっとノド使って仕事してるでしょ。だから、普通の人より弱いんですよ、逆に。だから、カゼひいたり、ハナつまったりとかっていう人が多いね。(自分もカゼひいたりすることが)ありますね。人より多いんじゃないかな。

Q アナウンサーは、リスナーの代表でもあると思いますが？

A ある部分ではね、ええ。

Q リスナーとの関わりはあるのですか？

A えーあの一そうですね、最近は直接には呼びかけたりはしないけど、けっこうそのネタの提供とか、そういうことについては、あの、呼びかけてるんですよ。だけど意外とあの一、そういう部分では、ラジオ聞いているみなさんっていうのは、どっちかっていうと受け身の状態というかたちで、ま、ほんとはそれ、心がけなきゃいけないことですよね。

Q 手紙などがくることは？

A うん、それありますよ。やったことに対する反応とか、批判とか、そういうお手紙はいただきます。それ以外にも、もちろん会社もね、番組審議会とかって、そういうあの一一定の人、リスナーを一年間とか、あの契約してですね、モニターをしてもらって、それについて書かれたものとか、1ヶ月に1回ぐらいまわってくるんですよ。ほいで、それを見て、まあ一喜一憂したりね。いろいろしてまますけど、はい。ただ、ま、全部の番組にまわってくるっていうのではないですけどね。特定の番組をピックアップして、それを書かれるわけですよ。「あのアナウンサー出さな」とかね、書かれたりとか。「不快だ」とかね。

Q そんなこと書かれるんですか？

A まあ、たまにはあるでしょう。

Q サンデーウエーブのリスナーのターゲットは？

A うーんまあ、ターゲットっていうのは、一番やっぱり（番組を）作る上で、考えなきゃいけないことで、さっき言った「演歌なつメロ日曜3時間」という番組だったら、もういわなくてもターゲットって想像ができるでしょう。でまた、「ヤングスタジオ」という番組だったら、それは聞いただけで、これはターゲットって想像できると思うんですが、サンデーウエーブの場合は、日曜の午前中にある番組ということで、あの一、時間帯だけでしほれば、わりと高齢の方が中心になって聞いているんじゃないのかなって想像は、できるんです。で、ABC（放送局名、仮名）っていうAMのラジオ局の場合は、どちらかっていうと若いみなさんは、もっと音質のいい電波を聞いてたりとか、CD聞いたりしてるんで、最近リスナーの高齢化が進んでると思うんですよ。だけどそれに合わせて放送を全部送り出していると、ますますそれに拍車をかけてしまうということで、あえて、その今まで、そのABC（仮名）のイメージで聞いている人と、若干ズレがあるかもしれないけれど、もうすこしそういう年齢層的にも下へずらしたりとか、あとそのテーマと話の、なんていうんですかね、いわゆるほかの番組とニュアンスを変えてやってみたりということで、ま、異色のやり方っていうかね。

Q サンデーウエーブの中では、メインのアナウンサーですよ？

A まあ、年長ですからね。

Q 自分がメインになって変わったことは？

A うーん、さっきも言ったんですけど、あの、自分はどっちかっていうとメインだといっても、ガーッとでてね、自分がしゃべってね、サンデーウエーブ自分の番組だぞーとい

って、自分の意見を述べたりとかいうタイプじゃないんですよ。これまでサブ的にやってきたこと、で一、そういう経験が生かされるっていうか、まわりの人たちが、いま何をしゃべりたいとか、そういうことをやっぱり常に考えながらやるべきだな、と、まあ、できてるかどうかわからんけど。うーん。

Q トラブルが起きたとき、一番に対処しなくてはならないのでは？

A まあ、ね。

Q 心理的にたよられていると感じますか？

A 番組やってる中で、特にそれはないですね。あの、アナウンサーってみんな自分が一番うまいと思ってスタジオの中では、しゃべってるんですよ。あの、後輩だったらね、たとえば、Iという先輩といっしょに仕事するときも、アイツがいなかったら自分がメインできるのになって思ってやってるような人たちだと思うんですね。どっちかっていうと。そんなにたよってるっていうのは困るし。

Q 18年間続いてきた活力となったもの、理由は？

A 活力ねえ、まあ、あの一。なんて答えましょう。

Q いろいろな人と会える楽しさなんかは？

A それはそうですね。一番の魅力ですよ、この仕事やってる中でのね。ただあの一、やめたいなっていうことでは、アナウンサーって誰でもできることじゃないでしょう。まあ、その、適性っていうのがあるんですよ。その、能力っていう問題だけじゃなくって、たとえば口の形だとか、極端に言えば歯並びだとか、あの一発音発声のことからね、はじまってくるわけだから、そういうのでいうと、もう自分の適性とか、ずっと悩んだ時期もあったし、誰でもそうだと思うんだけど、自分はアナウンサーに向いてないな、他の仕事したいな、(と)思うときに絶対もう何度もあると思うんですよ。その繰り返しだと思っただけでまあ、なんで続けてるかっていうと、それは、一概には言えないけど、まあ今になってしまえば、生活をしていくための、ひとつの手段ですからね。

Q お子さんは、仕事に対して？

A うん、まあ、関心は持ってると思うけど、あんまりね、うちの家族は観たり聞いたりしてないんです。うん。それはほか(のアナウンサー)とだいぶ違うな。うーん。他の人たちってけっこうね、家にいる人がいいモニターだったりすると思うんだけど、うちはあえて家に帰ると仕事の話であんまりしないっていうか、昔はそうじゃなかったんだけど、最近僕もね、家と仕事っていうのをあんまり一緒にしたくない。区別して。家にいるときは、仕事のことあんまりしたくない。それではいけないんですけどね。

Q 自分の出演した放送を後で聞きますか？

A えーっと、毎回は聞いてないですね。サンデーウエーブは、あの、カセットに同録(同時録音)を録ってるんですが、反省会の時に、前はよく聞いてましたけど、最近はときど

きっていうか。

Q 昔と比べて、放送の中での自分は、変わってきたと思いますか？

A もうそれは昔の方がたくさんテープおいてあるから、やっぱりほら、20代30代、今40代に入ったけど、肉体的にも変わるじゃないですか。声も当然変わるし、考え方も変化していくし。あの一こういうマスコミに働いている人間として、昔はそのジャーナリストっていうか、としての使命感が、若かったから、強かったと思うんですが、ま、最近報道をめぐるトラブルとかいっぱいあるじゃないですか。そういうことも含めて、こう中に長いこと身を置いていると、こういう業界ってというのはこれでいいのかなって思うことも、多々あるし、かまえていうのが若いときに比べると、だいぶ、ね、できてしまいますよね。

Q これからやってみたい仕事は？

A うーん、だからねー、それが一番ねー、ローカル局でいると難しいことだよねー。あの一こうどんどん若い人が増えてくるじゃないですか。仕事って、そんなに、あの一、極端にね、量がふえるわけでもないし、段階を追うように、あの一、上がっていくようにね、ま、なんていうか、グレードの違う仕事があるというわけじゃないでしょ。自分がこれをしたいと思っても、その、できるわけじゃなくて、こういう組織の中にいると。だからあの一、若いときは、そういう志向が強かった。自分はあれやりたいこれやりたい、と。今は、逆に、与えられた仕事をいかに自分なりにこなしていくか。こなすっていうとすごくあのサラリーマン的な感覚で聞こえてしまうかもしれないけど、でも、言われたことをちゃんとやるっていうのがいかに難しいか、ということですね。

Q サンデーウェーブのこれからの展開は？

A そうですねー、えー、今、特に、うーん、教えてほしいですねー。

Q 自分のコーナーを持つことは？

A いや、だから、僕は逆にその全体っていうかたちで、メインのあのウェーブレポートっていうのがメインですけど、あれが月4回あるとしたら、だいたい3回くらいは自分が中心になってやるっていうパターンで、いまやってるんですけどねー。

Q アナウンサーとして仕事をするときに、情動的なジレンマはないですか？

A うーん、そうですねー、というか、アナウンサーの性っていうかねー、どうしてもそういう一般的な落としどころに持っていこう持っていこうとしちゃうようなところ、あるんですよねー。だからサンデーウェーブでいうと、コメンテーターの先生とか、外部の人にスパッと行ってもらうと。でも自分が言っちゃうと、それはリスナーの反感をかうことになるんですね、どっちかっていうと。それをまあコメンテーターという立場の人に言っていただくことによって、リスナーの方にも共感が得やすいというか。だから割とコメンテーターの先生方も、今だいたい4人の方をお願いしてるんですけど、時代とともにメンバーも変わってますけど、このバランスというか、実を言うとそういうこともやっぱりあ

る程度考えながら、多様な意見をお持ちの方っていうか、かたよらないっていうか、そういうことも配慮しながら、やってるといえばやってる。だからその中で、合うとか合わないとかいうことに関しては、ジレンマは、あるといえば、ある。

Q 18年アナウンサーをやってくると、変わりますか？

A 要領はね、うまくなっちゃうでしょ、だから同じ仕事するにしても、例えば、入って（入社して）1年目の人が丸1日かかることを、自分だったらまあ、ちゃちゃっと2時間ぐらいでやっちゃうとかね。そういうことはあると思うんです。ただそれが、いいかわるいかっていうと、こういう番組制作っていうのは、あの一、ものを生産してる、単にそういう活動じゃないから、やっぱりある部分で芸術的な要素とか入ってきますから、それがいいかわるいかっていうと、また別問題と思うんですね。ただ、要領だけは、確実にうまくなったかなって気はしますけどね。

I アナウンサーインタビューについての感想

私たちインタビュー班がサンデーウエーブをはじめて見学させていただいたときに、まず感じたのは、Iアナウンサーが番組の中で中心となっていて、番組を作り上げていく上で非常に重要な役割を果たしているということであった。

他のアナウンサーやディレクターもインタビューのなかで、Iアナウンサーが番組の中で最も重要である時間の管理をしていることを認めておられた。しかしIアナウンサー自身は、番組中のトラブルに対しては自分が最初に対処しなければならないということについては「まあ、ね」と肯定されていたが、心理的に頼られていると感じますか、という質問には、「番組やってる中で、特にそれはないですね」と否定し、「そんなに頼ってるっていうのは困るし」とプロらしい厳しい意見をおっしゃっていた。

Iアナウンサーは、自分自身のことを「相手の良さを引きだすっていうタイプ」と分析され、メインのアナウンサーではあるが、「まわりの人たちが、今何をしゃべりたいとか、そういうことを常に考えながらやるべきだな」と考えて、番組を進めているそうである。

アナウンサーとして仕事をしていく上でのジレンマについては、「アナウンサーの性っていうかねー、どうしてもそういう一般的な落としどころに持っていこう」とするところがあると笑って、「自分が言っちゃうと、それはリスナーの反感をかうことになる」ことはコメンテーターの先生方に言ってもらうことでバランスをとっていると言われていた。

4人のコメンテーターのタイプがそれぞれ違うので、持っている意見も当然違って、そのあたりのバランスについても配慮しながら番組を進めているそうである。このあたりの、メインのアナウンサーとしての番組に対する細かい配慮について、本人から貴重な話を聞けたと思う。また、以前はコメンテーターとゲストが意見を戦わせるのを見ているのが非常に面白かった、という裏話も聞かせて下さった。

18年間のアナウンサー生活については、「要領だけは確実にうまくなったって気はしますけどね」と笑っておられたが、これからも番組の中心として活躍されることと思う。ありがとうございました。

入社・入社試験

入社したのは平成元年。ちょうど天皇陛下が崩御された年なので、昭和64年が平成元年になった年の4月です。入社試験は、まず「私と放送」というタイトルで小論文を400字詰め原稿用紙で3枚程度書いて、それを履歴書と一緒にまずABC(仮)に送って、その中から書類審査があって、書類審査で通った人だけハガキが来て、そのハガキが来たのでABC(仮)に受験に来て、でその受験内容はまず午前中に筆記試験があって、それはもう時事問題、英語、数学、国語も何かこう総合的な試験で、その後お昼からアナウンサーとしての試験があって音声テストが一次、二次とあるんですけど、まず第一次音声テストがあってそれは同時にカメラテストも一緒に、カメラで映しながら音声テストをするんですけど、審査員がこういて、5、6人いて、最初はあの簡単な天気予報とかそういったものを読んで、その試験が終わった後しばらくして、その合格者だけ発表されて、で受かったのもそのまま残って第二次音声テストっていうのを受けるんですけど、で第二次のテストは音声テストが詩の朗読とそれから3分間で自分の意見を述べよっていうフリートークがあって、テーマが阿波踊りか、瀬戸大橋か、それかイランイラク戦争かこの3つのうちのどれかを選んで、自分の意見を3分以内にまとめよっていう、それはあの一まあ控室で待ってて、あの一面接会場に行く前にまあ椅子にちょっと座られるんですけど、一人ずつ、その時にはじめてその問題用紙を渡されて、そこで初めて、あっこんな問題なのかっていうことを、ま3分か5分ぐらい見て、それからすぐ会場に入って、それも同時にカメラテストもしながら音声テストで、でその日の夜か次の日ぐらいに、あの一連絡のいった人だけ合格ですっていうことでその時に、電話が来たんですね。でその後今度は役員面接があるんですけど、まだあって、役員面接は1週間後ぐらいだったかなあ、だから女性はその時3人残ってたんですけど、役員面接で2人になったんですよ。でも、もう一人の女の子も結局北陸放送のアナウンサーになったので、よかったんですけど、うん。それが最終で。入社試験の倍率ですか。その辺はぜんぜんわかんないですよ。書類審査でどのくらい通ったかはわかるんですけど。私の友達とかでもね、その日たまたま九州朝日放送の試験と重なって、その時に人生の選択でどっち行くかで九州朝日放送受けて、落ちてしまった子もいるんですね。そっち受けずにもしこっち受けてたら受かったかもしれないし、それはもう運というか。でも重なったから分散したし、おかげでこっちは少ない人数ですんだみたいなのがあるし。だから春休みとかね、神戸の親戚の家に居候してそこから大阪通ったりして、でやっぱりずっと四国にしか住んでなかったの、でやっぱり本州ってどんなところだろうとかがあって、それはやっぱり暮らさないとわからないと思ったからやっぱり暮らしたいなあと思って。なんかセンスが身につかないとか言われて、田舎臭いとか。それは困ったと思って。いろいろ大阪の友達もいっぱいできたし、今でも友達は仲が良くて、札幌テレビにもいるし。テレビみてるズームイン朝とか、いっぱい中継友達が出てくると「ああ彼女も頑張ってるから私も頑張ろう。」と思うことがよくあります。

大学時代・ダブルスクール時代

私は、アナウンスの専門学校にダブルスクールで行ってたので、大学はK大学に行って、それで地方の国立大学だとアナウンサーになれないと思ってたので、高校出るときはもうあの東京の有名な大学の英文学科に行かなければと、頭がコチコチになってたんですけど、でもやっぱり親が、外には出さないということと経済的理由とかいろいろあって、結局出られないということになって、でも自分の好きな学部もないんですよ、地方のK大だと。でも絵を描くの好きだったので、だからもう全然関係ない教育学部の美術研究室に入って、でも自分で何とかしなければというので地元のラジオ局にアルバイトに行っちゃったりとかしてたんですけど、でも地方だと情報がないんで、もうこの受験というのは、もう情報がすごいんですね、全国300社くらいあるのかなあ、その中でどこが募集をしてるのかっていうのを知るだけでもすごい大変なんで、だから大学3年の秋に大阪の専門学校にダブルスクールで行って、大学に昼間行って、昼2時とか3時ごろから月曜と木曜日だけ大阪に行って、夜はその日に帰って来てたんですけどまだ瀬戸大橋が出来てないころで連絡船に乗ってめちゃえらかった。お金もかかるから、だから最初は関西汽船とかで4時間かけて行ってたんですけど体力がもたないとかっていうことでバイトしながら、お金ためながら、親にも世話になって、それで情報すごい集めて、でもその時にね、やっぱりあの、一人でかってに喋ってますけど、有名な大学の子の、すごい信じられないかもしれないけど、有名な大学の子の「私は何とか大学の何とかと申します。この度貴社に入社したく〜。」っていう、こう問い合わせの手紙があるんですけど、それを有名な大学の子の下書きしたのを写すんです。で何枚もそれを作って全国に発送して、で返事が来たのを一斉に貼り出して、それを見て自分が受験するという。もう全国北海道から九州までみんなで受験ツアーみたいな。多い子だと40社くらい受けて、私もだから教育実習が5月なので、教育実習行ってたら日テレとかTBSとかが受けられないので、教育実習は止めて、たまたまK大は教育実習行かなくても教育学部が卒業できたので、もう単位はギリギリで、で受けて、もし受からない場合は、卒業制作だったので美術は、卒業制作を教授に、もし受からない場合は、提出したけど、提出してないことにして、浪人させてもらうって約束で、だけどたまたま受かったんで、ま、今があるみたいな。もし受かってなかったら浪人して大阪に行こうと思ってたんで。うん、ほんとに大変だった。

今まで受け持った番組

これまでいろんな番組を担当してますけど、そりゃまあ何というかサラリーマンなのでいろいろしなくてはいけないので、自分がやりたかった仕事とやりたくはなかったけれど組織の一員としてこなさなければいけない仕事みたいなのがあって、まあでもいろいろあって、ラジオとテレビと両方あるんですが自社製作率がラジオの方が断然多いので、どうしてもラジオが多いんです。ラジオはまず新入社員の時は輪番勤務といって朝始まって夜終わるまで、番組と番組の間のつながりのニュースとか交通情報とか天気予報とかそういったのをずっと覚えていくというもので、覚えながらまあその情報を番組と番組の間に入れていくという感じなんです。だからまだ番組は持てない時代はそういうのをやって、あとはテレビのレポートの取材とかニュース番組の中のそういうのをやって、本当に一年目はもうすごいしんどかつ

た。というか仕事やしんどいっていうよりもやっぱり人間関係とか自分のやりたい仕事かなかなかできないとかで、自分に実力がないのにこういうのがやりたいと思って先走りするとすごくやっぱり悪い意味で目立ってしまって、まだ何にもできないくせにみたいになってしまって、結局はおとなしくしているのが一番いいんだみたいな。なんかちょっと夢破れてしまったみたいなのところがあったんですけど、今はいいんですけどね。2年目に番組を持ったときに“今週の一冊”というコーナーをやって、私はそのコーナーをぜひ引き継いでやって更に発展させようということで、県内のいろんな人にその人の愛読書をきいてまわる仕事をしたんですね、それはワイドの中のたった6分だったんですけど人間関係をやりくりしながら、まあ自分がやれるものを確保しておきたいということで、それはすごい楽しい仕事で、人に会って本も一週間に一冊必ず読んでそれで話を聞くというものでした。ところがその番組が終わってしまったんですよね、半年で。なんか徳島の人には本読まないとか言われて私はショックで、「なんで」とか思って、もうすごく沈んでその時にその番組だけじゃないけれどやっぱりサラリーマンの中にも一個ぐらいは自分がこれと思うものを持ってないとなんだかこうちょっと寂しいというか。自分は何のためにみたいなのがあるから。まあでもそんな中でも輪番の中でお昼の時間帯に“いすゞミュージックアワー”っていうのがあって、自分が音楽かけながら一人でしゃべる番組があるんですけど、その番組に随分支えられたというか、何言ってもいいから自分が感じたこととか実感持って思えることとかをしゃべろうと思って。だから何かこう新聞とかに書いてあるものじゃなくて自分が実際に見に行ってそれで自分が感じたものを基本にしゃべるということだったんですけど、それに随分支えられて、でその番組がなくなったときも、うじうじしていたんだけどもなんかたまたまIさんと飲みに行行ってそれでこんな番組がやりたいみたいな話をして、それでたまたま“サンデーウェーブ”ができたんですよ。だから“サンデーウェーブ”はすごく大事な番組で、Iさんもたぶん思い入れが強いし私も思い入れが強くて、私が今“A子のワンダフルピープル”というのをやらしてもらってるけどあの時間帯は普通はワイドの中でメインのアナウンサーがずっとしゃべりますよね、でも私に20分から25分の時間をくれて私の好きなようにみたいな感じでしてもらえるのは、最初のスタートがそういう関係で始まったからです。そのコーナーでは本はできないということでそれじゃいろんな人に会ってインタビューをするコーナーがしたいということを書いた企画を書いて、それで通ったという感じです。まあ他は土曜の夜の“とんでもナイト”とかは、もともとあった番組を、私がまあ、若手に代わっていきますよねだんだん番組が。そんな中で代わった番組で、他の番組はそういうまあ自分が企画して自分がとかいうんではなくて、ルーティンというか流れの中で先輩から受け継いできた仕事で、例えば宝くじのテレビの仕事とか、あとスポンサーのあるカラオケの仕事とか経済情報とか。

ワンダフルピープル

ただ、一人でやっていると独りよがりになってしまったりとか、なんかあの全然みんなが知ってることなのに自分だけ知らなくて、自分だけなんかいい気になっているとか、そういうこう危ない穴に落ちることがあるので、必ず番組が終わった後は自分で聴くようにして、でまあ反省してあと聴いてもらってる人もいて、あの先生みたいな人がいてその人に聴いてもらって批評してもらってそれでやっていると。人を選ぶのも基本的には自分が興味のある

る人ということで、よく今視聴者が何を望んでいるとか、そういうことを基本に人を選んだ方がいいとアドバイスしてくれる人もいるけど、でも私は基本的に自分が会いたいとか自分がおもしろいと思う人がおもしろいと思うので、そういう人を基本に選んでます。それとあといろんな人が紹介してくれるので、紹介して下さった方は必ずお会いしてみようみたいな。そうすると必ずまた紹介して下さるので。(先週のコーナーに出てもらった) S.Jさんの場合は、映画センターがまああの地方都市を配給している映画なんですけど、映画センターの人とは、私が入社した頃映画が好きだったので見られない映画を見る会に入ったんですけど、その時に知り合った人でずっとまあつかず離れず、長いことみたいな感じで。でその人が紹介してくれてインタビューすることになったんですけどそういうふうにいるいろいろ情報を出していると情報が入ってきやすいというか、そういうのもあるし、本当に今まで250人ぐらいの人にお会いし、いや150人だったかな、にお会いしたんですけど、やっぱりそのネットワークでいろいろこう、すごく仲良くなって今も一緒に絵を描いている人と一緒に飲んでる人とかもいるので、その人たちとのつながりの中で新しい人を紹介してもらえたりとかもするので。あと有名な人が徳島に来たときには本を必ず読んで、でその人のことを調べるのはこれは先生が言ってたんですけど、丹念に調べるんだけど、なんて言うかその人のことを知りすぎないというか先入観を持たないというか。例えば人に出てもらう時にはその人に少なくとも4日ぐらい前に会って話を聞いて、その時に全部聞かずにまあこれは本番で聞こうみたいなのをとっついて、それからあの、会った後しばらく普通に忘れて生活しているうちに沈殿してくるものと、上に上がってくるものがある。でその中からインタビューする内容を決めていったりとかします。先週のS.Jさんの場合は、日本の映画のシステムについてとかの話になったのでいろいろまたその映画センターの人に教えてもらいながら、文化庁の人に教えてもらいながら文化庁の資料を取り寄せたりしました。それで日本映画のシステムといっても人によっていろんな意見があるので、S.Jさんの意見が絶対ではないので、そのへんは難しいですね。だけどやっぱり主体性もあるし、だから客観的にと公平にとかっていうのもすごく大事と思うんですけど。私も生きてるので、やっぱり自分の考えを言うのが卑怯じゃないだろうなと思うし、でも言えないことってあるから、言うとな身の危険があるとか、そんなのはちょっと私は言えませんが。小心者のサラリーマンなのでそんなに大それたこともできませんけど。それに実力がないと相手にされないというのがよくわかっているんで、だから実力をつけることも大事ですよ、本当に自分が意見を言おうと思えば。人のことを好きになるのがわりと得意なので、もともと人にたいして懐疑心とかあまりないほうだったのでそれは良かったなあと思います。

リスナー・マーケティング・視聴率

よく放送で言われるのは中学生でもわかるようにみたいに言われるんですけど、でも例えば「カディンスキー」とかって言っても、わかんない場合はわかんないですよ。でもそれがすごく言いたくて、それでないと言葉がないみたいな時は使ったりしてるので、うーん、だからあまりマーケティングしてないんです。“ワンダフルピープル”はあくまでも自分が主体となるべくわかりやすく伝わるように心掛けているという感じです。それに週によって登場する人が違うので、特にこういう人に聞いてもらいたいなあとかっていうのはあるけれど、で

も若い人を対象にとも思っていないし、お年寄りを対象にとも思っていないし、どの年齢にも共通できるなにかがあればいいなあと思っています。それは“サンデーウェーブ”についても言えることだと思います。難しいんですけどね。ほんとは放送とかでは視聴率がすごいんですよ。Sテレビとか大きな局とかいったら、廊下はりまくりでエレベーターの中まで視聴率はってるんで、そういう競争があるところではやっぱりいかに聞いてもらうかということで、どんな層が聞いているかということで、その層をターゲットにパーツと絞り込んでいくみたいなのがあるかもしれませんが、うちは幸い一局しかないのもそういうのがあんまりないので。だからその辺は考えないのが幸せなのか、良くないのか分からない。視聴率が壁に張ってあるのがいいとは決して思わないし。でもNHKのように贅沢に予算をつかえる訳ではないということですね。

ラジオ番組の中でのパニック

失敗とかはよくあるんですけど、笑うような失敗とか。例えば、なんか音楽の回転数間違えるとか。33回転のを45回転でやって、なんかアリアが歌ってるみたいになったりとか、ニュースの後には必ず自分の名前を言わなきゃと思って残り一秒なのに「Sです。」とか言って、何だったかさっぱり分からなかったとかいうのもあるし。それから、ON AIRをとばしてしまうとか、すっかり忘れてごはん食べてたとか。そういう時はもうすごい大変で必ず部長のところに行って怒られるとか、何回も続くと譴責処分になったりとかするし。困ったことはもっと何て言うかメンタルな面で困ります。例えば、予算とのせめぎ合いとかで、ピアニストの人に演奏してもらおうと思って放送の時間でいうと3分の演奏に調律とかしたら、今1万かかるとして。そしたらプロでしょ相手は。払いたい、お金を。だけど3分で1万円じゃちょっと考えるとか。でもそれは本当はディレクターが考えるんですけど、ラジオの場合はアナウンサーもちょっと製作と一緒にかかるところがあるので。前にそれでいろいろ、ケンカができる程ケンカができたらいいんですけど、泣き寝入りとか。ケンカができるようになればいいですよ。

プロのアナウンサーとしての心掛け

放送禁止用語を使わないということです。これにもいろいろ論議はあるんですけど、文学上の表現で。だけど、びつことか差別用語ということになっているので、まあそれを言わないということ、やはりアナウンサーなので何しゃべっているか良く分からない、というようなことにならないように割舌（かつぜつ）とかはつきりしゃべるとか、そういうことは基本ですよ。あと人がいらっしゃる時にはその方になるべくしゃべってもらうとか。でもこれも考え方がいろいろあるので、自分の考えを主張して相手を怒らせてしゃべらせるとかいう方法もあるみたいですし、それは性格によって、アナウンサーのキャラクターとかによっても違うと思うので。やっぱりアナウンサーはコマーシャルもお金いただいて読むので、先輩からはよく、この1枚の原稿が何円なんだからということでお客さんが来るように読まなければ、と言われていました。やっぱりアナウンサーの基本はしゃべりですよ。だから、しゃべりが下手なのに、製作面でいろいろ言うのが辛いとか。でも時代はそんな時代で

はないと思うんですけど。ポーダレスで、少々しゃべりがあれでも内容が何かあれば、とも思うし。体調面で気を付けていることは、アナウンサーになって何かすごく喉が痛くなるようになったので、前は風邪をひいても、喉が痛くなるというよりは鼻風邪が多かったのに、今は喉がすごく痛いから喉が痛いなと思ったら、必ず早い段階で風邪をひかないようにするとか、熱が出て一晩でひくようにするとか。アナウンサーは風邪ひいたら恥なんですって。だから“おはよう徳島”やってたTさんとかは、ここからそこに行くのでもコートを必ず着るとか、本当に絶対に風邪をひかないようにすること。熱が出て笑顔でやってますからね、すごいと思う。親が死んでも、みたいな。親が死んでも来ましたからね。まあ私たちみたいにまだ親が若かったらだめですけどね。番組は絶対休まない、ということですね。私はつわりで休んだけど。2回“サンデーウェーブ”休んで、つくづく女の人は大変だと思ったなあ。それとやっぱり体力が落ちると気力も落ちて、それでも頑張ってる都蝶々とか、石丸ひろしとかやっぱり違うなと思いますね。

テープチェックについて

今でもテレビのニュースは全部撮ってて、あとラジオとかはVTRで残ってるので時々聞いて反省したりとかしてます。

反省会について

昼からいつも“サンデーウェーブ”は（反省会を）やってるんですけど、でもなかなか難しいですね。私も性格的にあんまり怒らない性格なんで、ケンカして怒鳴りあうほどやったことはない。あの全然話がとびますけど「カミュクロードル」っていう映画があって、その映画の中でクロードルっていういつも怒ってるんですよ。あのロダンの愛人なんですけど、自分もすごい彫刻家で最後発狂してしまうんだけど、お母さんと仲が悪くていつも怒ってる。怒りん坊とかかって言われてお父さんが、彼女をかばって彼女は怒りん坊ではなくって一途だから怒るんだ、とかいうのがあって、それを東京で午前中見て「ああ私って一途でないや」とか思って、昼からさまよい歩いたという思い出もあるくらい、怒れないんですよ。だから、怒れる人ってすごいと思いますね。その場でパーッと怒れる人ってね。でも、怒れる人に聞いたらそういうのはえらいから、やっぱり怒らない方がいいとか言うけど、たまってしまう。私。それで爆発するという典型的日本人みたい。だから本当に番組の反省会も、スパッと行ってみんながスパッスパッというような性格であとがない、とかいうみんなそんな人だったらいいけど、そんなこともないからやっぱり傷付いたりいろいろあるんです。それでこの人にはこういう風に言おうみたいな、そんなのを見極めて言う。本当の批評家っていうか、難しいと思いますね。

ストレスについて

買い物とか洋服買いに行ったりとか、あと、寝ると忘れられる性格で良かったなあと思うんです。尾を引かない、あんまり。でもずっとたまってる、誰かにしゃべるとやっぱり楽にな

るので。会社の中だと利害関係があるので、しゃべれないですよ、何でも。だから社外に友達をたくさん。まあ私みたいにインタビューの仕事をしていると、友達がたくさん出来たんで、社外に話せる友達がたくさんいるので、電話して話したりとかしてストレス解消してる。

アナウンサーをやっている良かったと思うこと

それはもうABC（仮）という名刺一枚で、ほんとに会えないような人に会えるという。これまでも狂言師の人間国宝のS.Sさんとか、S.Hさんとか、Y.Kさんとか、やっぱり私個人の名前だと会ってもらえないけどABC（仮）ってついてるとそれでもうブランドになって、安心して会ってもらえる。それでそんな有名な人から県内のいろんな人に会って、お話しさせてもらえて、その話をしたり、自分があの本を読んで良かったと思ったり映画をみて良かったと思ったりしたことを、自分の言葉で発言する場所があるということがいいですね。それを思ってもどこにも言うことが出来なかったら次第に勉強もしなくなるだろうし、なんか精がないっていうか。どこかで発言する場所があるから言葉をいろいろ選んだりとか、何でも勉強になるなと思って。好奇心とかも触発されたりとか、どこかに行こうとか思うので。

これからどんな番組を持ちたいか

私はもうすぐ育休っていうか、産休に入るんですけどまた子供を産んだらいろいろ考え方とか、妊娠しただけでもすごく、例えば女子保護規定撤廃の問題とか前とは全然違うように思ってきたし、いろんな経験を子供を産む事によって何か変わるような気がする。どういふふうになるかは分からないけれど。このインタビューの仕事も続けてはいきたいけれど、でも今までつくってきたネットワークとかいろんな専門分野の人達がいるので何か別の事が出来たらいいなとは思っているけど、まだ全然その具体的なものは何もない。このままインタビューでずーっといくのも何かこう一つの道を極めるみたいなんだけど、でも一週間ずつ一人の人間が変わっていくので自分がああ良かったと思っても、また次の週に違う人に会わないといけない。それならだんだん軽薄になってくるような気もして。何か例えば今週は火曜日に取材に行ったんですけど、もう日曜日には文楽人形づかいのY.Mさんにインタビューするんでその準備もしないといけないし。だから今週会った人に感動ばかりしてたら、でもつながるところもあるんだけど、何か一週間がとんでいくみたいなどころもあるんで、自分の中で消化不良のまんまいつてるような気もするので。1年間会社を休めるので、その間に何か自分で今まで会った人とかを整理したりとか、ちょっと文章でまとめてみたりとかできたらいいなと思ってるけど、赤ちゃんができればこんなに（忙しくなって）なってできないかもしれないけど。

先生のような人とは？

大学時代に私がバイトにいった時にディレクターだった人で、もう今はフリーで大学でジャーナリズム論教えてたりとか、メディア論教えてたりとか、あと自分でもしゃべったりする人で、わりと文学青年だった人だから、この人にはすごく人間て何なのかというのを教

えてもらったという。だから例えば、今回の野村証券の問題でも本当に悪いことしてますねーみたいに言うのってどうしても楽で、私もそういうのを、まあ私は地方だしそんなのちょっと言わないけど、でもキー局とかだったら言うじゃないですか。アナウンサーって会社の中にいて何か悪いことしてるのは本当に良くないですねーとかって。けどもし総会屋っていうのが暴力団であるならば、その人にお金を渡さなければ自分の身が危険だったら、人間誰でも渡すんじゃないですかとか思って。だからそういうものをすごく教えてもらったというか。そういうのを抜きにして、表面だけなでるようなマスコミの今までのそういうのにはなるなど。でもこれは行き着くところに行き着くと暴力団と天皇制でしたっけ、その人は別に共産党じゃないんですけど。でも責任のとり方とかいろいろやむやにしてきたこととかそういうことに原理というか何か基本的なこと、人間の基本的なことみたいなのを考えるのってすごくしんどくって面倒臭くって。そんなにしてたら毎日のニュースについていけない。でもマスコミは毎日ニュースですから「新しい」ですよ。だから一時このニュースが大事だと思って入り込んでも、こればっかりしてたらサラリーマンなのに自分に色もついてしまうし。あと社会は全部つながってるんでしょけど、表面上はいろいろな事件があるので、これを追いかけると何だかもう毎日グルグルとんでいってるという感じで。だから本当に人間とは何なのかみたいなのを常に忘れないようにということを、その人から常に教えてもらってるという感じですね。そういうのってなかなか教えてもらえない。教えてもらえないというか、口で言ってるもんじゃないというか。だから本当にその人との付き合いはしんどいし、結構辛いというか、ズバーッと言われるので、もう明日から生きていけないぐらい、欠点もいろいろ言ってもらえるので。それとその人の欠点もさらけ出されるというか、もう若いときは浴びて浴びて消化不良でもうあーっていう感じだったけど、今はなんか年齢もすごく離れているので、その年の人達の思っている事とかも私と同年齢の人よりは少しは分かるような気もするので、まあ良かったかなあと。あと、高校生の友達とかもいるので若い子の考え方も、いろんな人と付き合わないといけないなと思いますけど。でもその人は本当に人間とは、みたいなところを教えてもらった、本当に私の先生だと思ってます。

仕事と結婚

高校の時に、まあ小学校1年のときからアナウンサーになりたかったけど、雲の上と思っていたから、でも高校のときに自分の人生とか進路って一番考えるから、その時にやっぱり人間って1日の間で寝てる以外はだいたい仕事をしてるのがいいと思って。それでも絶対仕事しないのはちょっと考えられないんですけど。だから子供産んでも仕事したい。K県と徳島で遠距離恋愛して、それで私の場合は徳島でずっと住んでる人と結婚するのが一番いいでしょう。もう結婚できないなと思ったんやけど。物理的にもう別れないかんとかってほなけど彼の方が、別に結婚生活がどんな形であろうと、結婚すれば何とかなるんちゃうとかいう軽い一言で、ほな結婚しようかってことになって、ていうか1年半位はずっと別居してた。で、たまたま、ほんとにたまたま徳島に去年の暮れ転勤になったんで、良かったなと思うけど。でも2.3年たったらまたどこ行くかわかんないんで、どうしようかって思ってるっていうか。子供にお父さんはやっぱりいつもおる方がええかなあとかね。本当に仕事に集中できるのは独身のときだけやなあ、女の方は。何かいろんな、子供の守りに入るんかなあ。若いとき

にどんどんしといた方がいいよ。

Sアナウンサーインタビューについての感想

Sアナウンサーは、サンデーウエーブが放送を開始した当初から、サンデーウエーブに出演されていたアナウンサーである。アナウンサーになりたいとずっと思っていて、大学3年の時に大阪の専門学校にWスクールをして、「めっちゃえらかった」けれど、「もし受からない場合は（中略）浪人させてもらうって約束」をして、アナウンサーになったとおっしゃっていた。

しかしアナウンサーになっても、1年目は「サラリーマンなのでいろいろしなくてはいけない」ことが多くて、「ちょっと夢やぶれてしまった。」その後「サラリーマンの中にも一個ぐらいは自分がこれと思うものを持ってないとなんだかこうちょっと寂しい」と思っていたときに、「たまたまIさんと飲みに行って、それでこんな番組がやりたいみたいな話をして、それでたまたまサンデーウエーブができた」んだそうである。「だからサンデーウエーブはすごく大事な番組で、Iさんもたぶん思い入れが強いし私も思い入れが強い」とおっしゃっていた。

また、「A子のワンダフルピープル」については、「普通はメインのアナウンサーがずっとしゃべる」時間だけれど、「私の好きなようにみたいな感じでしてもらえるのは、最初のスタートがそういう関係ではじまったからです」と言われていたが、それだけではなく、メインのアナウンサーであるIアナウンサーが「相手の良さを引き出す」というタイプであることも関係していると思った。そして、「独りよがりになったり」しないように番組が終わった後は自分の放送を必ず聞いたり、「先生」と呼んでいる人に聞いてもらって批評してもらったりしているそうである。自分の番組に対するプロとしての責任感とプライドを感じた。

アナウンサーの立場については、「客観的にとか公平にとかっていうのもすごく大事と思うんですけども私も生きているのでやっぱり自分の考えを言うのが卑怯じゃないだろうって思うし、でも言えないことってあるから」と難しい部分があることにふれておられた。

インタビューのあと、しばらくして産休に入られたSアナウンサーだが、「1年間会社を休めるので、その間に何か自分で今まであった人とかを整理したりとか、ちょっと文章でまとめてみたりとかできたらいいなと思って」いらっしやった。母になられて大変だろうと思うが、アナウンサーという仕事に対して非常に真摯な姿勢で取り組んでおられたSアナウンサーなら、復帰された後もいろいろな人と会って、がんばっていかれると思う。ありがとうございました。

Gアナウンサーインタビュー

’ 97 / 9 / 5 ABC (仮) 3スタジオにて実施

Q 入社したのはいつですか？

A えーっとね、ちょうど今年で5年めですね。だから(19)90(年)今が7年ですから(19)93年ですか。(19)93年入社ですね。はい。

Q 今おいくつですか？

A えー今年で28になります。だから一回、大学で一回留年してるんで、えーどうなるのかな18、19、20、21、22の24の時入社ですか。24歳で入社です。

Q なぜアナウンサーの道を選んだのですか？

A あーその質問ですね。えーっとですね、あの一大学がね、えーK大学のえー商学部だったんですよ。で、まあ、商業勉強する学部で、ていうのが、あのうちがね、あの一雛人形屋やってまして、でーまあ自然にやっぱり親の仕事とか見てるから、まっ自然にその一商売を継ごうかなっていうまっ自然な流れでその商学部を受けて、で通ってでまあ四年間勉強したんですけど、大学四回生の時に、あの一、いざ、その就職一のまあシーズンですよ、就職試験始まる時になって、で、全くなにも考えてなかったんですよ、ていうのが、自分は本当今までもう自然にその一親のやってるのを継ぐんだらうなってすごく思ってた、で、その流れで来たから、全くその就職にはあの一頭の片隅にもそういうのはなかったんですね。ただ、やっぱり四回生になって、周りが就職でばたばたしだすと、あーこれは、ねー、なんかやらないとだめかなっていう、そういうかんじであの一、就職のその一就職読本って出てるじゃないですか、そういうのを買って、ばらばらってみたら、たまたまその一、マスコミってのが目について、でーあの一大学時代にね、商学部に入ってたんですけどあの一、まっマスコミ研究会みたいなかんじのっていうかどちらかというマスコミよりもその雑誌ですね、だから自分達でミニコミ誌みたいなをつくらうっていうそういう研究会があるんですけどそれにも入ってたんですよ、そのながれで、あの一最初は雑誌関係を受けてみようかなと思ったのが始まりですね。それからいろいろ研究するに従って、いや、雑誌よりもそういう放送局のほうがもっとおもしろいことができるんじゃないか、でやっぱり放送局の中でもいろいろ仕事見るとやっぱりアナウンサーっていうのは、一番表に出る仕事で、でー就職試験も一番厳しそうだったんで、どうせやるんだったら一番その一、厳しいところチャレンジしてみようじゃないかっていうんで、まっアナウンサー受けてみようかなっていう気持ちになったんです、まっただね、やろうと思った人が四回生のまっ本来なら皆さん就職が決まってるね六月七月だったんですよ。それから勉強始めたんでまっ一回留年して五回生に改めて受けたということです。

Q その一年の間、どこか専門学校へ行ってたのですか？

A 大阪にね、井上(仮名)教室っていうアナウンサー専門学校があるんですよ。そこに行っていましたね。かなり特殊な学校なんです。そこで主催してる人が、一匹オオカミっていうか、すごく変わりもんのおやじでね、有名なんです。放送局受ける時に、「井上

(仮名) 教室行ってました」って言ったら落とされますよ。嫌われてるんですよ。そのね、代表の人が60越えてるんですけど、大阪出身の人で、NHKに入社してNHKで10年くらい、それから読売テレビに移って、だから結局NHK喧嘩してやめたんですよ。で、読売テレビで副部長までいったのかな、かなりアナウンス室の中ではえらいさんまでいったんですけど、そこでもまた管理職の上役連中と喧嘩してやめちゃって、で、放送局はもういやということで、教室を開いて生徒を育てているわけなんです。合格率はね、100に近いんですよ。普通の有名なアナウンス学校でも、全体の数10%もいっただろごいじゃないですか。10人に1人もなれないじゃないですか。そのかわり、少数精鋭なんですよ。ダメだと思ったら、さすがに暴力まではいかないですけど、言葉の暴力で、まっそれに傷ついてみんなやめていくんですけどね。だから、やめらされた生徒を入れると、あれなんですけど、もうたたかれてふんずけられてふんずけられていった、そういうのを最後まで面倒みて on air で使える声と実力はおれが教えてやろうっていう、寺子屋みたいな所ですね。人数も少ないし、ぼくらの時で30人くらいいて、でも11人くらいやめて、20人弱が合格。そのかわり、残ったのは全員合格しましたね。

Q まる一年いっただけでいいんですか？

A いや、やっぱりね、長いこといった方がいいんですけど、そのへんは微妙なところで、話しだすと難しいですけど、例えば大学一回生からこういうとこいって3年やってさあ4年目です、てなると、すごく癖ついちゃうんですよ。読み方に。で、そういう人って、やっぱりいざ試験になると、嫌われるんですよ。

Q 専門学校で学ぶことと、実際に職場で学ぶことの区別がありますか？

A そうですね。特に僕関西にずっといたんで、関西にいて専門学校いく生徒はだいたいアクセントと発音、これにつきますね。標準語しっかりしゃべるといふ。うまい読みというのは学生で到達しないですね。なかにはうまい子もいますけど。逆に言うとそこまでいく必要ないんじゃないかと思えます。だから、僕は、ここしかいってないから、他の専門学校はどうか分らないですけど、ここに関しては、一年くらいがちょうどいいんじゃないかな。基礎から始まって、発音、アクセント、そして標準語がだいたいしゃべれるようになるのが一年くらいなんですよ。それくらいで変な癖がつく前に受けに行くのがいいかなってすごく思いますね。その一、四年勉強したからなれるもんでもないですからね。

Q アナウンサー専門のところなんですか？他にもディレクターなども養成してるのですか？

A いや、ここはね、アナウンサーとあとタレントっていうか、ラジオでフリーでしゃべったり、ナレーションとかそういう人も教えてるんです。けど、おもにアナウンサーですね。

Q 小さい時からアナウンサーになりたかったわけではなかったのですか？

A ぜんぜんないです。だからあの一、関西生まれの関西育ちなんで、かなりアクセントとか、大変でした。短い期間でね、やらないとだめだから

Q 今までどのような番組に出ましたか？

A えーっとですね、まっ入社して最初はまあ基本的なそういう番組ってのはもたないんですね。だから、よく皆さんラジオとか聞いてるとその、ピーッと時報がなって「正午になりました。それではニュースをお伝えします。」みたいな感じで、あの15分とか10分のニュースがあるんですけど、それから始まって、で2年目に、2年目にこの“サンデーウェーブ”の一員としてあの、番組に参加させてもらうようになりました。で今はですね、あの“サンデーウェーブ”日曜日とそれから金曜日に“カモン電リク”金曜日のナイターが終わったあとなんですけど11時45分までの番組、リクエスト番組です。音楽の、その二本をやってます。

Q “吉野川紀行”(“サンデーウェーブ”のコーナー名)はKさんが企画したのですか？

A いや、あの一実はですね、僕がそのサンデーウェーブについて今から3年前、4年前になるのかなあのころからねほとんどサンデーウェーブの内容ってのが変わってないんですよ。今と。で、入社2年目で、まだ右も左も分からない状態で番組に参加させてもらって、で、どのコーナーがいいだろうなっていうような時に、まっ一番短い時間で、で、あちこち吉野川紀行って自分で取材にでるじゃないですか。だからまっ、若いうちはどんどん外に出ろっていう、まっ上からのそういう考え方もあって、で、あの吉野川紀行から始めたわけなんですけど。

Q “吉野川紀行”はどのようにして作られているのですか？

A 主にですね、徳新(徳島新聞)からのネタが多いですね、最近。あの徳島新聞のローカル面に、えーいろいろ、そうですね、川に関する事とか、あの載ってるじゃないですか。例えば、どここのあの何歳のおばあさんがその、吉野川の絵を何年も書き続けて展覧会を開きました。ってそういうのを見るとあの、だいたい住所が出てるので、電話帳を見たり、もしくは104で調べて電話をして、番組のテーマを説明してそれから取材に行きます。で、取材に行くのにDATというカセットテープレコーダーの高級っていうんですかね。カセットは小さくなるんですけど、非常に音のいいあのカセットテープがあるんですよ。でそれを持って行ってそこで話を聞いて、だいたいね、あの1時間は1時間ぐらいですね。説明も合わせて、向こうに行って話を聞くのが。だから実際最初番組の説明とか、いきなりね一始めちゃったらむこうもこう緊張してしまいますからね、あの軽い話とかでふふふ、で実際に、あの話し始めてからはだいたい30分、40分ぐらいテープ回しますね。で、それを持って帰って、最初のうちはね、自分で編集してたんですよ。で、今年の四月から、あのディレクターが変わりまして、で、彼は編集をやりたいということなんで、編集はもう、そっからはまかしてます。だから今まではそれをいったん編集して、で前枠と後枠のそのコメントですよ、自分で考えて、書いてやりました。

Q “吉野川紀行”は録音テープを流すという仕組みなんですけど、リスナーにとってライブ感がなくなると思うのですが、それに不安は感じませんか？

A あのね、自分でコーナーを考えて始めたときはそういうのを考えるんですよ。だからこれを聞いて、人がリスナー例えば自分のそのターゲットを絞ったね、10代だったら10代、20代だったら20代のそのリスナーが聞いてくれるだろうか、また例えば、会社のその上層部っていうんですか。内部の人も聞いてますから納得させるだけのコーナー

になるだろうか、ってすごく気を使うんですけど、やっぱりこういうふうには最初からあったコーナーを受け継いだ場合っていうのは、そっち方面にはそんなにねあの一、意識いかなかったんですね、正直な話。で、やっぱり入社二年目で、何も分からない状態で、ましてやあの一、出身が兵庫県ですからこっち来て二年目ですよ。一年しかいないわけですよ。で一年の中で吉野川紀行っていわれても、吉野川っていわれてもその川でしょ、ぐらいにしかおもってないわけですよ。あの一昔がどうだったとかどんな魚がいるとかわかんないわけですから、そっちの方を勉強するのに必死で、そこまで考える余裕がなかったというのが本音ですね。ただあの一、今言われたライブ感なくなるっていうんですけどね、あの一実はね、今は多少ウェーブリポートの内容もまだ、あの一、ソフトになったっていうか、えーそれがあるんですけど、昔はもっとheavyだったんですよ。例えばね、その一、自然保護をもうちょっと真面目に考えてみようよって、すっごくねもうかなり筋の通った自然保護派の人たちがきて、こう、ガンガンやりあうようなそういう番組だったんですよ。だからそれをちょっとあの一かなり重いネタが続いた後のまっほんの、5分、10分くらい休んでもらいましょうよっていうそういう意味も込めて吉野川紀行があったわけなんですよ。あの一前後に音楽を挟んでるじゃないですか。あれもその一貫なんですよ。音楽を聞いて、で、川の音を聞いて、まっちょっと気分をリラックスしてもらいましょっていう感じのコーナーなんですよ、もともと。

Q 一般にアナウンサーは中立の立場をとるとされていますが、吉野川に対して、中立の立場でコメントできてますか？

A えーっと例えば、中立的ですよ。その一吉野川への想が強くなって中立でなくなるっていうのは、まっ今だったらやっぱりその一開発か、保護か、っていうことですね。になってしまいますよね。えっと、これはね一、実際に勉強すればするほど難しい問題なんですよ。だから第十堰にしてもあの一、第十堰付近に住んでる住民にしたら、実際賛成派の方が多んですよ。というのが、もし、あの一堤防を決壊したら、家とか財産失う可能性あるし、とすると、命まで失ってしまうかもしれないじゃないですか。だいたいその一、第十堰付近の人たちが、もう堤防をね、第十堰とっばらってしまっって、堰をつくってくれて言ってるんだったら、これは、例えば僕なんか松茂（徳島市郊外の地名）に住んでるんですけどあの一、直接関係ない人間がね、いや自然は大切だから、だからおまえたち命が多少危険にさらされてもいいじゃないかっていうふうには絶対言えないですよ。だからそういう部分ではあの一、やっぱり言えない部分ってのはありますよ。あの一、意識して中立になっているわけではなくて、やっぱり両者から話を聞くじゃないですか。両方から聞いたら両方ともこれ本当筋通ってる部分もあるし、逆に僕らが聞いてても、ちがうだろっていう部分もあるし、だから、あの一、実際意識しなくてもその一、断定はできないですね。これがね、もしね、僕が第十堰周辺に住んでたら、もっと意見は出せると思うんですよ。でも、僕はあの一少なくとも子供の頃から吉野川でアユをとっていたわけではないし本当こっち来て、まっ4年ちょっとで、最近になってその一、釣りをするようになった、で一河口のね、その一、川原を走る程度ですからなかなか言えないですよ。

Q この前は徳商（徳島商業高等学校）の取材お疲れ様でした。実際に取材に行くのと、スタジオでトークするのはどちらがおもしろいですか？

A あっそうですね、やっぱりおもしろいのは、実際現場に行く方がおもしろいですね。

えー、やっぱりあの一生の声が聞けたり、で一例えば、その一試合でもね、仕事じゃなくても実際球技場、球場それから現場に行つて生のものを見るのとやっぱりテレビの前で見るのとではちがうじゃないですか。同じようなものですね。

Q 今まで一番印象に残っている取材は何ですか？

A やっぱり、そうですね、阪神大震災の時ですね。あの淡路島に行つてまっ現地で一あの北淡町という所と一の宮町、まっ一番被害の大きかったね、まっ淡路島の中では一番被害が大きかった所をその一二つを取材して、んあの一よかったことはぜんぜんないんですけどね、あの、そうゆう悲惨な場所ですから。ただ、やっぱりそういうとこで取材して、なんて言うんですかその一仕事のその一厳しさを知ったというか、ん一、そういうのはありますね。はい。で一楽しかったのは、あの一、音楽番組やってるじゃないですか。で、アーティストと会えるんですよ。これはもう文句無しに楽しい仕事ですね。だからその一テレビなんかであの一見てるアーティストいるじゃないですか。で一例えば、パンクロックのアーティストなんて、テレビではすっごくねもうすっごくもうだら一つてしてて、もう司会者がなんだみたいなね、リスナーあの一、視聴者がなんだみたいなそういう態度とるんですけど、実際裏にまわるとすっごくいいひとだったりすることがあるんですよ。そういうのを見ると、なんかすっごくうれしいですね。

Q 今まで放送中で一番困ったことは何ですか？

A 放送中で一番困ったことですか。困ったこと・・・えー、やっぱりその一、阪神大震災の時ですかね。うん。あの一ちょっと放送業界の中の話になるんですけど、現場にいてみんなよくしゃべっているじゃないですか。あれ一、画面に映ってるのは、まっリポーターがいてマイクがあるだけなんですけど、実際、その一周りに人がいるんですよ。例えばあの一時間を計る人とか、それからカメラマンももちろんいるし、で、カメラの後ろにはもちろん中継車っていう大きな車があるんですよ。あの一、パラポリアンテナのついた、衛星回線を使った、衛星回線ですよ。衛星回線を使って、例えば、その淡路島で撮った映像を日テレに送って、で日テレから全国へ放送してるんですよ。で、僕その一、一番に淡路島に入ったんですけど、まっその車とね、カメラマンはいたんですよ。でもあと誰もいない状態だったんですよ。で、普通まありポーターがしゃべっていると、前で、その、テレビ画面で今こういう場面が映ってますよってこれニュースでもそうなんです。僕ら、あの一、スタジオでニュース読んでても、目の前には、あの一、いわゆるプロンプタっていうね、原稿を写す画面があって、その横に今自分の映ってる自分の顔、まっ on air の状態のテレビの映像が流されているわけなんです。カウントダウンの時計なんかもついたりするんですけど、まっそういう小さいテレビ、小型テレビっていうんですか、そういうものもあるし、それから、あの一、いわゆるエアモニ（エアーモニター）っていうよくみなさんね耳にイヤホンつけてますけど、あれは東京からの、ま、全国放送の場合ですよ、東京のその on air が聞こえてくるわけなんです。だから東京のスタジオで「それでは淡路島の何々さん」て呼んでくれたら、それに入つて、「はい」っていうようなかんじですか。それもなかったんですよ。で、あの一、テレビもないと。だから本当にシーンとした状態ですよ。地震で壊れて、なんかシーンとした状態で、あの一目の前にカメラがあつて、今もう全国中継のつてるよって言われても、あらってかんじでね、あの一ときはちょっと本当に困りましたね。で、しかもね、全国中継が初めてだったんですよ。あんときは何

もしやべれずじまいで終わっちゃって。困ってる僕の姿が映ってたらしいですよ、後で聞いたら。その時はね、僕本気で辞表書こうとマジで思いましたよ。

Q でも一応無事に終わったんですよね？

A いや、無事じゃ、あはははは（大笑い）ぜんぜん無事ではありませんでした。

Q 状況は伝えることはできたのですか？

A 状況を伝えることはできませんでしたよ。うん、もう本当に、いや一家がこんな状態でえらいことです。はい。終わりみたいな感じで終わっちゃって、以上です、つてもう自分からね、終わっちゃって。でーただ何回かあの一その当時の状況ってのが、関西からね淡路島に入ることができなかつたんですよ。もう全部港が壊れて、船でしか行けないじゃないですか。淡路島行こうと思ったらね。こっちから行くっていったら鳴門橋しかないわけですよ。となると、ABC（仮）が一番乗りだったんですよ。淡路島に入ったのが。その震源地に入ったのが。ふえ、ねえ、他の局、例えば、徳島ってあの一民放が一つしかないっていうね、ABC（仮）しかないんですよ。で、日テレ系でしょ、NN系列。だから他の例えば、TBSとかが、いや淡路島の映像下さい、っていっても、「いや、だめなんです。うちは日テレだけなんです。」ってそういう世界なんですよ。だから、うちしか行ってないんですよ。だから日本テレビにしてみたら、少しでもその一、震源地の映像とかほしいわけなんです。だからもう十分おきくらいに呼ばれてその度に、「いやー、もうー、こんな状態です。以上です。」その繰り返してね、うん、まー、今から考えてみてもゾッとしますね。

Q Gアナ自身におけるマンネリ化対策は？

A あー、マンネリ化ね、ありますね、マンネリ化は。例えば吉野川紀行。どうしてもネタが同じなんですよ。例えば、6月になるとアユが始まります。アユの人の話を聞きに行きます。で、9月とかなってくると、台風のシーズンなので災害を経験した人とか。だいたいね、一年を通してネタが決まってくるんですよ。そうなってくると、いわゆる、マンネリ化してきますよね。もうね、マンネリ化したらしてきたで、特には対策はとっていません。ただ、仕事は吉野川紀行だけじゃないんで、他にもスポーツ中継とかあるし、特にスポーツ中継になると、マンネリ化しようがないんで、やっぱり、目の前にある試合を中継するわけじゃないですか。マンネリ化するには、仕事が厳しすぎて、マンネリ化できないのが現状ですね。毎回新鮮だし、だから、そういうのがあるからなんとかマンネリ化せずにやっていますね。だから毎年スポーツとか、大きい仕事が廻ってくるシーズンになると自分でも分かるんですよ。気合い入ってるのが。だから、そういうのが、あるから、マンネリ化は今のところないです。これから10年、20年したらわかりません。

Q 番組（サンデーウェーブ）におけるマンネリ化対策は？

A それは僕が気をつけなくてもIアナがいるんで大丈夫です。まっ、最初役割って部分でどうしてもね、ディレクターがまだ25歳で若いんですよ。実質的なディレクターはIアナなんですよ。ネタから最終的判断するのはIさんなんですよ。で、毎回11時まで放送ありますよね。で、昼御飯食べて、1時から反省という形で打ち合わせなんかもやるんですけど、悪いところとか指摘されますし、まっ、自分でも分かるじゃないですか。

今日はこの部分でもうちょっとこうやってればよかったかなと思ったら、ずばっと指摘されますし、そういう意味でIさんの存在は大きいかなって思いますね。もし、なんらかの理由で、Iさんがサンデーウェーブぬけちゃうと、ちょっと難しいですね。一から全部変えないとダメですね。他に誰かが来るにしても、残っている我々でするにしても、全部作り替えないとダメですね。それぐらい大きな存在ですね。自分は部屋の中しか見てないけど、Iさんは天井裏の釘まで見てるんですよ。例えばコメンテーターの先生が4~5人いらっしゃるんですけど、その先生のことをよく知っているのもIさんなんですよ。多分Iさんが10のことを知ってたとしたら、僕は3~4、ひよっとしたら、半分も知らないんじゃないかって。だからもっと全体的な知識を広げていくっていう。そこでIさんがいなくなると、相手にも失礼だしコメンテーターの先生にも失礼だし、リスナーに対しても失礼じゃないですか。隅々まで分かっている人と、表面しか分かってない人が同じことするとしたら、同じようにやってるようにはみえてもどこか違いますよね。もし自分が中心となってやるなら、全部一から見直して、全部を自分の中で消化して行って、初めて番組が成り立つのでは。それからサンデーウェーブはじまってからの流れも大切ですよね。一時は硬派なのやってたんですけど、今はちょっとソフトになって、家庭の主婦とかが家事しながらでも聞けるようにしてるんですけど。まっ、昔からの流れも大切ですよね。

Q 番組内で何か気をつけていることはありますか？

A 最近余裕をもってできるようになったんですけど、それでもまあ、新しい番組とかちょっと慣れないテレビの特番とかになるとかなり緊張すると思うし、そうなったらやっぱり緊張してる状態でできることって限られてるんですよ。だから、例えば、ここはこうやってやってで20もやることを並べられても絶対にできないんですよ。だから、大切なことを5個くらい頭において、あとはもうその放送の中で、勉強していくのが多いです。だから、最初僕が気をつけたのは、二時間の番組でしょ。その中で、自分がしゃべるのはどこなんだってチェックしましたね。だから一番困るのがやっぱりみんなで協力してやってる番組ですから、Iさんが「～～です。」ていった後に僕がでないと困るんですよ。僕がでるところで。間ができちゃうと今までつくってきた流れがバタッと、止まっちゃうでしょ。だからそれだけは絶対やっちゃいけないなっておもったんで。例えば今だったらまずIさんが「〇月〇日、日曜日、ABC(仮)サンデーウェーブです。」ていった後すぐにニュースヘッドラインが入るじゃないですか。その時に向こうのマスター(光ディスクを用いた音声放送装置)からでるんですけど“*This morning's head line news*”っていう“どなり”があるんですよ。それいった後に僕が読むという、それ大切なチェックですよ。今ではもう普通にできますけど。最初のうちは、どなりがあるのかないのか忘れることが多いんですよ。どなりがあるのに勝手にヘッドラインニュース読んじゃって、読んでる最中に、“*This morning's head line news*”って入っちゃうとかっこわるいですからね。そういうのすごい細かくチェックして、何ヶ所か二時間の中で、自分はここはこれを気をつける、ここは誰々のしゃべった後にでる、であとはもう放送の中で覚えていきました。

Q 声が重なったこととか、失敗したことはありますか？

A 重なったことはないんですけど、番組の中でありますね。それとウェーブレポートのコーナーでアジアのコーナーやってるんですけど、9:25~10:00までで、曲もクッションでおいてるんですよ。で、あるとき曲も全部なくなっちゃって、もう曲もかけ

ないってことになったんですよ。曲カットしますって指示がきて、ということは10:00の時報ピッタリに切らないといけないんですよ。ところが話をどうやってもまとめることができなくなっちゃって、わー、あと一分なのにまだゲストしゃべってるわ、どうしようって思ったら、もうやっぱりそういうときは残り30秒ぐらいでIさんが、「はい、ということで」て、しゃべってるのうまいぐあいに「何々しましてね、なるほど、はい、今日は、ですねー」ていう感じで話を終わらせてくれました。そういうときは本当助かりましたね。

Q 曲はそういうためにも入ってるんですね？

A そうなんですよ。10:00の時報をずらすわけにはいきませんから。曲はのぼしたり縮めたりできますからね。5分の曲を選んで入れてたら、9:55~10:00までの間いつ話がおいてもいいじゃないですか。まとまった時点で、「はい、ありがとうございました」って。そういうかたちでも曲はあるんですけど。

Q 話が10:00までにまとまらない場合も、話をむりやりきるのですか？

A そうですね。時報の方が大事ですから。

Q 途中で曲カットとかBGM（バック・グラウンド・ミュージック）で流すとかの時間調整は誰がするんですか？

A あれはですね、Iさんがするときもあれば、ディレクターが判断する場合があります。

Q Iさんは自分の判断をどうやってディレクターに伝えるのですか？

A あのね、ほんの一瞬の間にカフを下ろして、この白いボタンがトークバックといってむこうにこれ、例えば今カフを下ろしますね。で、今こうしゃべっている声は全部むこうに入ってるんですよ。だからこうやって、「曲カットします」って数秒でおわらして、で、またカフ上げてしゃべってますよね。ほんの一瞬です。だから例えばほんのちょっとだけ、RT（パーティシペイティング・コマーシャル=番組時間中に放送されるCM）CMが入ったあいだとか曲をかけてるあいだとか、例えばサンデーアジアとかになると、アジアの曲紹介があるじゃないですか。一曲かけて、いったんみんなカフ下げますよね。で、曲がかかっている状態、そのときに残り時間とかみて、この後二曲目はカットでというのを軽く指示したり、そういうのはあります。

Q 相談して曲カットとか決めるんじゃないんですね

A ないです、ないです。

Q では、先に判断した者勝ちですね。Iさんが先に判断したらその指示に、ディレクターが先に判断したらその指示に従うのですね？

A そうですね。ただディレクターが判断しても一応Iさんが総合ディレクターみたいなもんなんで、Iさんが違うってときにはIさんの意見ですね。Iさんの判断が一番ですね。

Q スタジオ内での曲カットの周知はないんですね？

A ないです。

Q 皆Iさんを見てるわけですね。

A そうですね。それはね、教えてもらうんじゃなくて、毎回毎回するに従って自然に分かっていったんですよ。

Q 曲は多めに組んであるんですね？

A そうです。カットするのは簡単ですからね。増やすのは難しい。

Q どれくらい曲組んでいるんですか？

A 4分×3曲=12分くらい用意してますね。

Q IアナやSアナはイヤホンしてるのに、Gアナはイヤホンしてませんが、それはなぜですか？

A (大笑い) これね、こわれてるんですよ、僕のぶんが。ずっと前から。音が入るんですけどすごく雑音が入ったり。こういうのはね、本来直してもらわないといけないんですけどね。

Q 困りませんか？

A うん。僕は困らないですよ。(笑) あのね、えーと2Fに4スタっていうスタジオがあるんですけど、4スタではつけないと困るんですよ。これね、なんでつけてるかっていうと、これね、例えば、基本的に、カフっていうのがあるんですけど、これ下ろしちゃうと全く声入らないんですよ。で、上げると声が入る、放送にのるわけなんですよ。例えば吉野川紀行のBGとか、CMとか、それぞれ番組始まったときの“ABCサンデーウェーブ”って外国人の人が言うじゃないですか。そういう声はカフ上げてると聞こえないんですよ。2Fのスタジオでは、基本的に耳(イヤホン)から入ってくるんですよ。

Q いつから話せばいいか全く分からないわけですね？

A そうそうそう。そうなんですよ。だからね、例えば、サンデーウェーブの“ウェーブレポート、ジャカジャカジャカジャカジャン”ってこう入るじゃないですか。ジャンっておわったところで、カフをばって上げてしゃべるんですけど。基本的にね、カフ上げちゃうと音が聞こえなくなるんですよ。だからイヤホンをつけてる、イヤホンからはずっと聞こえるから。ただ、このスタジオはね、その音が聞こえてくるんですよ。そのスピーカーから。だからスピーカーからそれを返してもらってるんで、全然困らないということです。

Q でも、ディレクターの人が直接話しかけるのはスピーカーからでないことがありますよね。

A あれはね、そのぶんここにテレビモニターがあってこれをつけると、向こうにカメラがあって、今、手映ったでしょ。こういうので指示出してくれるんですよ。だから僕、主にこっちのほうでやってるんで。

Q 番組のトップの自己紹介のあいさつの言葉は事前に考えてるんですか？

A ぼくね、どうしてもちょっと背伸びしちゃうんですよ。というのが、番組のレベルがちょっと背伸びをしないとついていけないんです。だから準備します。

Q 2、3日くらい前からですか？

A いや、そんなことはないです。当日の朝です。数分前にやるか数十分前にやるかの差なんですけど。その差結構大きいんですよ。思いつかなかっただらえらいことですよ。でも、時々準備を忘れることもあるんですけどね。いけない、何も考えてなかったとか。あまりバカなこともいけませんしね。やっぱり朝の情報番組なんで、ちょっと話の奥がないといけなくて、それがね、難しいんですよ。正直いって“サンデーウェーブ”の中で一番嫌なコーナーが、朝のあいさつなんですよ。あれは僕の等身大の姿じゃなくて、仮面を被った姿なんですよ。

Q “サンデーウェーブ”の中で、職種混合化はしてませんか（アナウンサーであるだけでなくパーソナリティー化しているのでは）？

A やっぱりうちとかはローカル局なんで、まだそこまで行ってないですね。やっぱり、パーソナリティーやってる人もいますが、あくまでアナウンサーの枠の中でやってますね。うちのアナウンサーの中で「おれはこういう生きざまだ。おれについてこい。」ってやってる人はいないですよ。その一、(ABC(仮)の中での)レベルの差はあっても、東京とか大阪とかでやってるようにはできないですね。だから皆アナウンサーとして意識してやってますよ。

Q これからつくってみたい番組はありますか？

A そうですね。あのねーラジオでもテレビでもどっちでもいっていったらあれなんですけど、どっちかっていったらテレビがいいんですけど。この前徳商がベスト8までいったじゃないですか。あーゆうのを県大会のときから地道に取材して、一つの結果(ベスト8)を出しましたよね、そういうのをドキュメントでつくりたいなど。自分がディレクターも兼ねて、もちろんナレーションも兼ねて。もちろんディレクターはいますよ。企画をもちこんでということ。

Gアナウンサーインタビューについての感想

吉野川第十堰問題に関して、私自身が詰めてない質問をしてしまって、Gさんに、「それはどういうことですかね」と聞き返された時に、答えに詰まってしまって何も言えず、それは私の詰めてない質問が原因で、質問しているときにすでに自分自身があまり理解していないことは分かっていたのだが、まあなんとかかなかなと思っていて自分が甘かった。質問内容を十分に理解していないまま質問するということは、実に恐ろしいことだと身をもって実感した。

上記のインタビュー内容でよく分かるように、Iさんが実質的なディレクターであり、時間調整も行っているという。例えば、スタジオ内にゲストを呼んで話をしてもらう時など、Iさんはゲストの話だけに聞き入ってしまうのは時間管理ができないから、ゲストの

話を聞きつつも、時間チェックもモニターを見て常に行っている。とすると、ゲストの方ばかりに気を向けることはできないから、そこはGアナウンサーや、Nアナウンサーがフォローっというか、ゲストの相手というか、そういうふうにしてゲストの方に失礼のないように、番組はチームプレーで成り立っているということがよく分かった。

マンネリ化対策に関して質問したところ、Gアナウンサーは「ありますねマンネリ化は。例えば吉野川紀行。」一年を通じてのネタが同じになってくると言っていて、でもそれは、以前のサンデーウェーブはもっと堅い番組であって、吉野川紀行はその息抜き（心を落ち着かせるようなもの）みたいなものであり、Gアナウンサーはそういう番組の構成を知っているから、別にマンネリ化に困っているふうではなかった。また、吉野川紀行に対してマンネリ化がいけないというふうでもなく、逆にマンネリ化もいいというようなニュアンスも込められていたように思える。また同じ質問をNアナウンサーにしたところ、まだ番組に出始めて間もないから自分自身の番組に対するマンネリ化はもちろんなく、で、一年を通じて話すことが決まってくる（季節ネタなど）のは仕方ないのでは、と言いつつも、もっと情報網を広げたいのだが、話題提供者もいなくて、挫折せざるを得ないと言っている。このマンネリ化に対する意見の相違はGアナウンサーとNアナウンサーの番組の方針に対する考え方の相違であって、Gアナウンサーはスポーツ番組に大変熱を入れており、Nアナウンサーは新しい人にいろいろなことを聞くことがよいという方針で、一見同じ考え方のように思えるが、よくよく考えてみると、実は違うのである。

私達のあいだで、“IアナウンサーやNアナウンサーはイヤホンをしてるのに、Gアナウンサーだけイヤホンをしてないのはなぜだろう”という疑問がずっと持ち上がっていたのだが、インタビューすることによって、その理由を細かく説明してもらえたのでよく分かった。

これからつくってみたい番組は、この前徳商が甲子園でベスト8まで行って、県大会からベスト8にいたるまでを追ったドキュメンタリー的な番組といていたが、そういうのはぜひともつくってもらいたい。というのはGアナウンサーは様々な所に取材に行っているからその経験を十分に生かしたら、実にいい番組に仕上がるのではないかと思うからである。ありがとうございました。

入社までの経緯

入社したのは、今 今年が3年目ということは、1995年ですね。(199)5年の4月ですね、あってるかな、ふふっ。Gさん、私より2コ上ですね。私はダブルスクールなんかには全然行ってません。普通の大学。もともとアナウンサーになるつもりが全然なかったんです。大学は、あ、えっとですね神奈川県内の大学に行ってたんですけど、学部は、まれな、今いっこしかないかもしれないんですけど、環境情報学部っていいまして、何をっていうか、主に私がやってたのは、コンピューターのソフト関係やってたんですけど。あの一できたら、卒業したら、東京のほうの会社で働きたかったんですが、ま、ひとりっこんんで、両親も帰ってこいっていうことで、もうもめにもめて、ま、じゃあ仕方ないから徳島県に帰ってこようと思って、ま、いろいろ徳島県の会社って限られますよね、だからこの業種っていう風なしほりかたできなくて、とりあえず、ま、有名所っていうか、(そういう)ところを何社か受けて、その中の一つがたまたまABC(仮)で、だから別にアナウンサーになりたい人っていうのはたぶんそういうスクールに通って、いろんな全国各地の放送局回るんですけど、私はもうここだけしか受けてないですね。

入社試験について

入社試験は、そう一般と、アナウンサーとがあったんですけど、記念受験的なって言うか、そのアナウンサーの試験ってどんなもんだろうっていう興味からはいって、もう内定ほかの会社からもらってたんで、ま、別に、一般だったら別に、っていう感じがあって、アナウンサーの試験を受けようかなって思ってみたら、こうなった。アナウンサーの方を選んだ理由ですか？うーん、ま、もともと一回落ちてたんですね、ここ。アナウンサー。他の方が決まってたんですけど、その方が他の局にいて、で、穴があいて、回ってきたんで、結構8月の阿波踊りぐらいに電話かかってきて、それその段階ですすでに、ここだめだったから違う会社の内定式はないですけど、内定者の懇談会にでちゃってたんですけど、ま、やっぱり謎っていうか、未知数っていうか、どんな職業かも分かんないし、いろんなことが体験できそうだっていうんで、こっちを選んだんですね。前行こうとしていた会社は、大学でやってたことが生かせる会社だったんですけど、ま、ここだったらゼンゼン関係ない、ま 無駄っていうか、大学4年間勉強してきたことは何だったんだ、って親にも言われたんですけど、魅力っていうか、どんな職業か分かんないってところにひかれて、入ってきました。

入社してから

あと入社して、研修があるんですけど、いろいろ話聞いて、アナウンサーってそれまでどんな仕事って、実際どんな仕事しなきゃいけないかっていうのを聞いてるうちに、絶対

私には無理だ、と思って、思わず研修中に、アナウンサーも一般（職）に変われますかって聞いちゃったんですよ。もう、こわくなって、できないと思って。

Wスクールについて

Wスクールに行かなかったことに対する後悔ですか？それはすごくありましたね。あの一決まってから一応その、アナ室の一番上の方のすすめで、やっぱり学校へ行った方がいいっていわれて、入ったんですよ。10月くらいに。3ヶ月くらいの講座。もう東京では有名なアナウンサー学校だったんですけど、はいつて10何回で終わるんですけど、1回目いってダメだ、こんなのは私には、っていうか、雰囲気はなんていうんでしょうね、「私はモデルよ」とか「アナウンサーになるのよ」とか、高飛車っていうか、キャッキャしてるっていうか、その雰囲気がなんかこの田舎から出てって、そういう芸能界みたいな匂いっていうか、ああいう感じなのかなっていうのがして、これはついていけないと思って、あと2、3日は行ったんですけど、もう行かなくなりました。すぐ。で、なんか先生も偉そうっていうか、うーん、こんな人とはできないっていう。でもやっぱり、続けて行っとけばよかったって今でも思うけど、その一たまに今でも、こう、アナウンサー研究会って、全国のアナウンサーが集まって、なんか研修することがあるんですけど、やっぱりアナウンサーアナウンサーしてるんですね。で、結構ABC（仮）にいたら、そんなアナウンサーって雰囲気じゃないんです。けど、全国の（アナウンサーが）集まってきたら、うーんみんなアナウンサーっていうんで、ひいちゃう。私もひいちゃって、なかなかこう、疲れる。いるだけで疲れるっていう雰囲気。で、その雰囲気が、いまだに嫌い。ここではあんまりないんで、ほっとしてる。だからやっぱりそういうスクールに通ってるとか、昔からなりたくっているんな放送局受けてる人っていうのは、そういう雰囲気っていうか、すごい持ってる人で、それはいまだに慣れないし、自分は向いてない、向いてないっていうか、アナウンサーらしくないアナウンサーなんですね。今、ABC（仮）でも。だから、大学時代に勉強した方向にいつてば、自分の力っていうか、生かされたかもしれないっていうのはやっぱり今でもたまにフツと思うときはあるんですけど、でもこっちもこっちで面白いんで、今に至ってるってかんじですかね。

これまでの仕事について

これまでの仕事ですか？テレビとラジオと両方ありますから、両方してるんですけど、主にラジオの方が多いですね。えー1年目のときは、あの一、ラジオカーってご存知でしょうか。（それ）に乗って、リポーターがまず最初の仕事ですよ。あとそれ以外の日は、輪番っていうかんじで、ニュースとか、交通情報とかを、みんなでこう、かわりばんこっていうか、ローテーションで、まわってやりましたね。主にその2つ。で、2年目、3年目になると、ま、いわゆるワイド番組的な、朝だったら「えんやこらワイド」、昼は「午後はこれからはりきりワイド」っていうのがあるんですが、そういった番組の何日かを担当するようになったりとか、あとラジオでも、特番とかあつたりしますよね、そういう、ま、カラオケ大賞とか、あと小松島の歩け歩け大会だったら、なんか5キロぐらい歩いて、

みんなで放送しながら歩くとか、そういう特番があるときは、そのスタッフに入ることもあるんですけど、主に自分の持ち番組プラス ニュースとか、天気とか、そういう輪番の仕事ですね。で、テレビになると、今は徳島の広報番組やってるんですけど、それ以外は例えば、夏だったら、高校野球とか、あと11月はサッカーとか、ラグビーとか、あるんですけど、そういう風なりポーター、応援席とかベンチのリポーターやったりとかありますね。レギュラーである番組に、特番があったら、たまにポツポツと出るっていった感じですね。これまでの取材で、一番おいしい思いをしたのが、北海道の帯広。みんなにうらやましがられたっていうか。えっとね、徳島市の広報番組で、産業文化姉妹都市なんですよ、それで、こっから訪問団が行くっていうんで、一緒に同行、途中までして。札幌は雪祭りですけど、帯広は氷祭りなんですよ。その取材に今年の2月ぐらいに行ったんですよ。それはみんなにいろいろ言われました。ズルイとかいって。すっごい寒いと思って、気合入れて行ったんですけど、向こうの方がこんなにあったかいときはないって言うくらいの、いいお天気っていうか、あったかさかげんで、ま、でも0度とかきるんですけど、恵まれてました。あと、いろいろ行きますね。餅つきも行くし。いまりハビリ講座っていったりハビリの先生と一緒に介護の仕方をシリーズでやってたりとか、あとどっかで文化祭があるっていったら行くし、ネタは市役所の広報の方が決めるんですけど、ひょうたん島のクルージングに行ったりとか、まあ徳島市の広報番組だから、市内中心ですよ。

Iさん、Sさんについて

Iさん、Gさんとは、特番では一緒だったことはあっても、レギュラーの番組では、はじめてですね、二人とも。サンデーウェブに決まったきっかけですか？まあ、Sさんとの関係もあるんですけど、今、女子アナをみた場合、結構女子アナが足りない時期で、その配分っていうか、その一、この番組に適してる年齢層とか、キャラクターとかいろいろ考慮した結果なただけだと思うんです。実力？そんなことないです。

女子アナが足りないのは、あの一、まあ、Sさんがお休みっていうので一人減りますよね。これまで契約タレントさんがしてた番組を、女子アナがやろうじゃないかっていうことになって、ようやく取り戻したっていう時期なんです。10月から。プラス一人休んでるっていうことで、結構足りない状況なんです。今までタレントさんがしてたんで、ま、大丈夫だったっていう面もあったんですけど、その分もやろうじゃないかってきて、一人休んでっていうんで、ちょっとみんな大変な時期ですね、今。やっぱりあのABC(仮)のラジオの方の中心番組っていうと、月から金の帯番組、朝は「えんやこらワイド」、昼は「はりきりワイド」ですよ。それをアナウンサーがやらずして、タレントがやっていいのか、いいのかっていったらいいんですけど、アナウンサーとしてやっぱりこうやりたいっていうか、取られたままでいいのかっていうのはありますよね。だからっていう感じで、別に職種の幅を広げるというよりは、まあ、いい経験にもなるじゃないですか。いつもニュースばかり読んでるより、ワイドしてあいつちの勉強したりとか、いろんな、クイズの枠があったりとか、なんでもまあ、こやしになるっていうか、その経験の場が、今までなかったのが、取り戻したことによって経験ふめるわけですよ、で、しゃべる時

間も長くなります。ニュースだったら、2、3分ですよ、ワイドしてたら、何時間もしゃべるので、しゃべらないところ、経験というか、育たないというか、ずっとデスク座ってただけだったら、全然伸びないっていうか、いい勉強の場がもどってきたというかんじですね。

サンデーウエーブ初出演について

サンデーウエーブにはじめて出たのは、10月12日です。緊張、やっぱりこうその番組の進行が、頭に入ってないというか、回を重ねないと、体に染み込んでこないんで、次は何、次は何、次は何っていうのを自分で絶えず次のことばかり考えていて、今を見てないっていうかんじで、すごい緊張しましたが、多分まわりの方も緊張してて、いろいろ言ってくれたんで、無事終わったって感じなんですけど、やっぱり前の晩とかドキドキしますね。

他の番組と比べて

他の番組と比べてですか？そう、まったく違います。相手というか、アナウンサーもみんな違うんですけど、番組のコンセプトっていうか、違います。サンデーウエーブだったら、ま、結構カタイというか、なんていうんでしょうねー、知的な番組っていうか、ニュース性がある番組ですけど、月曜日の番組（大人になりたい）は、もうおちゃらけてるっていうか、何でもあり、同期の林田健二（仮名）っていうアナウンサーと2人でやって、ディレクターがいないんですね。だから、好きなテーマで、好きな人を呼んで、好きなふうに時間っていうか組めて、できるっていうんで、もう、いろんな、高校生ネタから結構マニアなネタまでとか、UFOとか幽霊とか、あやしい、何でもありっていうか、結構自由がきく番組ですね。で、「えんやこらワイド」は、もうあの番組は、カチッと決まりすぎてるといいうか、いじりようがないっていうか、やることやることがずっともう決まってるんで、その枠にパッパッパッってはまってって、成り立ってるっていうか。一番こうアシスタント要素が強いのが、「えんやこらワイド」で、だからもう本当に全部違いますね、役割っていうか。

サンデーウエーブについて

サンデーウエーブの中のチームワークですか？あくまでもっていうか、メインはIさんですよ。だから、Iさん何を言いたいとか、どこまであいづち打てばいいのかとか、どの番組でも共通してるんですけど、どこであいづち打てばいいのかとか、やっぱり目で見たりとか、経験っていうか回数重ねたら、あうんの呼吸っていうか、があるんで、本当にもう慣れないと、なかなかうまくいかない、かみあわないかなーっていうのはありますね。あと、複数だと、安心ですね。もし自分が間違えたこといっても、すぐ訂正してもらえっていうか、今のはちよっとってかんじで、ま、いろいろ注意されるし、顔見てたら、あ、言っちゃいけないかなって思うこともありますよね。

番組の中で話す時は

話す順番のタイミングですか？あいさつ？さいご？あ、曲名とか、テーマとかドナるのですか。はい、あれは決まりごと。あれはもう慣れないと、私もだからいまだにビクビクしないと。これは私言わなきゃって、書くんですよ、朝。たまに忘れて怒られるんで。最初本当に番組始まる前に、こう言って、こうでこうでっていう段取りを教えられて、テープ聞いたりして、かんじっていつのつかんで。段取り覚えるしかないっていうか、自分のものにするしかないってかんじですよ。あれはもう決まってて、テーマを言って、私がゲストを紹介するっていう決まりごと。私もうっかりっていうか、ボーっとしてること多いんで、忘れて。今日、曲、一曲目紹介するときに、私まだ今日はじめて知ったんですけど、いつもIさんが、では音楽まいりましょう、かなんかかって、私が、なんとかさんの、なんとなかって曲って紹介すればいいと思ってたんですけど、そうじゃないってことがはじめて。あとで、結局今日は曲まいりましょうって（Iさんが）言って、私曲紹介したんですけど、その前に、間があったんですよ。空白っていうか。で、おかしいな、と思って、もしかしたら私が全部やんなきゃいけないのかなあって思って聞いてみると、そうだったっていう。ゲストの紹介ですか？それは私の役って聞いているんですけど。日によって違いますね。ゲストご紹介しましょうって言われて、なんとかさんですって言うときと、今日は、最初なくて、前半フリがなかったんで、それはもう自分の方で言うべきかなって、その瞬間に判断します。言う担当っていうのは決まっていますけど、これを言ったら私のしゃべる番っていうのは、決まってないです。最後何の言葉で終わるか、その日その日によって違いますよね。だから自分で判断するしかない。

12月7日の番組について

今日はですね、いつももっとしゃべらないんですけど、結構私も加わらないといけない、たまたまネタっていうか、ガーデニングも、一応メインっていうか、誰が中心になるかっていうことが決まるんですけど、今日は私が一応中心だったんですよ。ガーデニング。だからあれだけしゃべってたんです。で、今あの、紅茶と、星と、犬と、あとアウトドアと、ワイン、5つあるんですけど、3人で割り振って誰かが中心になろうっていう話なんで、今日までの段階では紅茶は私になるんじゃないかっていうことで、Gさんよりも私の方がしゃべってたっていうのは、そのへんがあるんですよ。

下調べについて

下調べですか？そうですね、ま、テーマが決まりますよね、決まったら、やっぱり本屋でも注意してみるようになったりとか、今日、結局本使わなかったんですけど、本買ってみたりとか、テレビでやってたら、あっと思っていたりとか、新聞読んでても、コピーしたりとか、ま、最近インターネットとかはやっていますけど、インターネットで調べたり

とか、やっぱりしますね。うん。

新しい企画について

サンデーウェーブの中での新しい企画は、今の番組の構成から見ると、なんか新しいのが入るスペースっていうのはもうないですよ。だからそのメインのコーナーのウェーブレポートとか、あのこだわり講座の中のテーマを選ぶときに、今日も1時から、いつも1時から会議してるんですけど、そこでいろいろみんなが、こんなテーマはどうか、っていうかんじで話すので、その時に自分のやりたいテーマがあったらこれはどうですかかっていて、じゃあそれやってみようってことになったら、それで自分が中心になって。はい。え、反省会？反省会... あの、今後の打ち合わせっていうか、来週はこれとこれのテーマ、次はこれとこれっていうか、こう表っていうか、それぞれ個人で持ってるものは違うんですけど、日曜日のが入ってますよね。で、埋めていくっていうか、埋まってない日があったら、この日じゃあなんのテーマにするとかそういう感じのが、打ち合わせですよ。反省会っていったら、今日の話どうだったかとか、もうちょっといろんな話が聞けるから、もう一回今度いつごろ呼んでみようとか、うまくっていうか、まあスムーズに流れてなかったら、これが原因だったから、今度はこうしてみようとか。そんな、濃い反省会ではないんですけど、やっぱりちょっと簡単におさらい、反省会、たまに、同録（同時録音）テープ聴きっていうか、後ろに流しながらやることもあるんですけど。

マンネリについて

マンネリですか？どっからきいたんですか？自分が、今日数えてみたら、まだ6回しかやってないですよ。だから自分の中では、マンネリ化してないっていうか、まだまだ慣れない状態ですけど、やっぱりこうメンバーが決まって、ゲストもローテーションとか、何ヶ月ぶりに来たとか、テーマも、一年通じて起こること、徳島にいても、ボコボコ事件も起きないし、そんなに新しいことないですよ。だからどの番組でも、マンネリ化っていうか、しゃべることなくなるんですよ。うーん。だってもう季節の物っていうか、もうすぐクリスマスですけど、クリスマスが近づいてきたら、ま、クリスマスのお話、でも去年も話したし、おとしも話したして。ま、それは仕方ないっていうか、季節ネタっていうか、みんなが気になることだったらしゃべるし。もっと情報網っていうか、広げればいいんですけど、なかなか特派員がいるわけでもないし、新聞とかね、しか、情報源っていうか、こんな人がいるってほしい新聞とか、人に聞いたとかですよ。だから結構月曜日の番組で目指してたのが、ゆきとどかないじゃないですか、郡部まで、で、特派員じゃないですけど、各町村に、親しい人を作っという、こんな話題があるんですよって言ってきてもらえるような番組ができれば最高だって思ってたんですけど、挫折。なかなかやっぱりむずかしいし、向こうの人も、多分こんな話題役に立たないんじゃないかなって、提供してくれないっていうかね、こっちから電話して聞いたら、こんなんありますよって言うってくれると思うんですけど、自分から電話して、言うってくれる人はいないですね。もっといろんな人いると思うんですけど、なかなかしりあえないっていうか、その点ラジオカー

乗ると、飛び込みとかでも、農家のおばちゃんに話し聞いたりするんで、意外な人を発見したりはしますよね。今、中の仕事がメインになってるんで、なかなか出会いもないんで。やっぱりマンネリはするでしょう。それをどうにかするために、いろいろ考えるんですけど、なかなか（うまく）いかないですね。

プロのアナウンサーとして気をつけていること

うーん、プロのアナウンサーとして気をつけていること、やっぱり一応何ていうんですか、会社、私がどっかで悪いことしたら、会社の名にキズが付くっていうか、お客さんが来ても、愛想よくっていうのは常に考えてますけど、うーん、それが偽善、偽善っていうかねえ、なかなかまあみんなに対して、ニコニコしてっていうのは、心がけているんですけど、自分がプライベートで嫌なことがあったときとかが、大変ですね。特に放送にある程度出てると思うんですね。前の晩なんか嫌なことがあったとかだったら、多分あんまりしゃべらなかつたりとか。いけないと思いながら、出てしまうという、そういうコントロールができるようになったらいいなっていうのは、すごい思いますね。あとは、体調ですね。今結構崩してる方なんですけど、まだキャリアも浅いんで、寝なかつたりしたら、声が出ないとか、割舌（かつぜつ）が悪くなるとか、すぐ出るんですよ。睡眠不足の悪い影響が。先輩と比べると、先輩は前の晩少々寝不足でも、一定の声が出るんですよ。この幅で。カゼひいたりしたら別ですけど、少々のもんでは、もうだいたい何があってもこうこの幅で、安定性があるっていうんですか、声に。でも若いと波があるんですよ。出る日もあって、出ない日もあって。お酒遅くまで飲んだ、とかによって全然違う。体がまだ全然できてないっていうんでしょうか、先輩は多分起きて、おはようって言ったら、（声が）出ると思うんですね。でも私たちそんなおはようって一言言っただけでは、絶対でないし、発声練習して、出るようにするんですけど、なかなかそれをして出ない。寝起きとか全然出ない。体が寝てる。大学受験のときに、試験の3時間前までに起きるように、とか言われますけど、それと一緒にじゃないですけど。（発声練習は）部屋ではしないですけど、スタジオがありますよね。時間があるかぎりはやったりとか。あと車の中とかが多いです。昔結構ね、（通勤距離が）5キロぐらいあったんですけど、そのときは、多分対向車の方は、何あの人って思ったと思うんですけど、一人で運転しながら。今はすごく近くなったんで、終わらないままに着いちゃう。会社に来てやったりするんですけど、絶えずやっとなきやダメよって言われますしね。多分、何十年とか、かかるんでしょうけどね。まあ、もともと生まれ持ったものもあるんでしょう。けどね、ある程度は、声が出てくると思うんですよ。

失敗について

失敗談ってね、すごいある、あるんですけど、これ、私、けっこう記憶力っていうか、すぐ忘れる方なんですよ。失敗談。いっぱいありますね。ちっちゃな、本当にちっちゃな、だから、やらなきやいけないっていうか、これは誰が読むっていうのが決まっても、それを忘れてたりとか、本当、大きな失敗っていうのはまだないですね。ちっちゃな失敗が

すごいあるから、ちょっとすぐにごでこない... 申し訳ないんですけど。番組を抜かしたこともかもないですね。それだけ、結構私時間を守るっていうか、几帳面。まだないですね。幸運なことに。でもみんな結構飛ばしてますよね。うん。警報ピーピー鳴ってたりとかして。走っていったりとか。うん。その空白の部分が何十秒か、忘れたんですけど、何十秒かあれば、ピーピーなるんですよ。無音の部分が何十秒かできると。機械が自動判別して。もうとりあえずそれを聞いたら、みんなスタジオに走って行って、そこにある、ま、天気予報の原稿だったり、交通情報の原稿だったり、とりあえずなんか読む。そうすると、まあ、技術の方が、いろいろこうしてすぐ回復したりするんですけど。次のコマーシャルが出たりとか。警報が鳴るとアナウンサーはとりあえずみんな走る。大変ですよー。ぶかっこうっていうか、で、ハアハアいってるじゃないですか。だからなんかねえ、オカシイ放送っていうか、出た者が損っていうか、聞いている方は、誰が本当はしなきゃいけないかったかっていうのは、知らないわけですから、その人が遅れたみたいで、ハアハアいってるし、なんだこいつは、みたいな、損しちゃいますよね。

プロとしての責任について

プロとしての責任ですか？サンデーウエーブより、朝の「えんやこらワイド」の方が、ニュースの枠もあって大変っていうか。その番組の中で、一番しゃべれない時間。寒いですね、暑いですねとかいうときは、何でも言えるじゃないですか。でもニュースってあの総会屋がどうだとか、山一が倒産とかになったら、何を言ったらっていうか、知らないと言えないじゃないですか。朝いつも7時前には来るんですけど、やっぱり寝ないと体調もって思って、夜11時には寝るんです。でもニュース知らないとしゃべれないんで、見なきゃって思って。そしたらもう家に帰っても、仕事っていうか、絶えず気にしたりとか。あ、これ、今度柿の実がこれぐらいの色になってきたらこうなんだ、とか、いつもこう仕事っていう感覚があって、私結構深く考えすぎてしまうんで、疲れてしまったり、自分の時間が持たないっていうか、そういう時すごい困るんですけど。

ストレスについて

ストレスですか？ストレス発散は、今はできてないですね。どうやって発散しようって考えてる時期なんですけど、家に帰ってもニュース気になったりとかするんで、仕事のことを忘れるために、今日映画見に行こうって思ってるんですけど。こう映画観てる時とかは、その世界に入ってますよね。忘れられるっていうか、仕事とか、嫌なこととか。だから、うん、映画とか観るのが好きですね。以前までは、レンタルビデオ屋さんがとなりのとなりぐらにあって、帰りに行って、週何本も観てたんですけど、今もう何ヶ月も借りて観てない状態で、だからストレスたまってるのかなーとか、いろいろ考えてるんですけど、とりあえず今日はちょっと映画に行っておようかなと思ってます。

これからの課題

これからの課題ですか？そうですね、一人っ子なんで、わがままに育ってるんですよ。で、けっこうしゃべるときも、自分中心に、自分がこうだからみんなこうじゃないかっていうのを勝手に思ってしまうって、発言してしまうんですけど、よくそれを注意されるというか、もっとみんなが、こういう事件が起こったら、大多数の人が思ってるだろうってことを、考えてしゃべりなさいっていうかんじで言われるんで、大多数の人が感じてることを自分も感じて、それを伝えるっていうか。自分のエゴに走っていかないように、こころがけようかなって思ってるんですけど、なかなかうまくいかない。気づいたら、自分中心になってたりするんですよ。アナウンサーはあくまでも伝える側であって、自分がまれな意見を持ってたとしても、あんまり言わない。タレントさんは、いろいろ言ってもすくわれるっていうか、アナウンサーじゃないし、社員でもないし、皆さんに近い存在の目からいろいろ言えるんで、かえってそちらの方が、ものが言いやすいと思うんですよ。ま、社員でアナウンサーっていうのを意識したら、自分の個性をバンバン打ち出すっていうのは、ニュースのときに限ってですけど、皆さんに受け入れられる方を選んでしまうっていうか。ゲストやコメンテーターは、アナウンサーに言えない領域ってあるじゃないですか、そういうのが、担当っていうか、そういう役割。社員、アナウンサーが言えないようなことを言ってもらっていうのが、かなり必要な存在。

Nアナウンサーインタビューについての感想

サンデーウエーブでは最も新しいアナウンサーであるNアナウンサーについては、インタビュー班のみで1度見学させていただいただけだったので、予備知識を集めるために、3人で先生からNアナウンサーの出演している他の番組のことや、サンデーウエーブに初めて出演されたときのことなどを聞いて、できるだけ調査として有効な質問ができるように努力した。

Nアナウンサーが、これまでにインタビューさせていただいた他の3人のアナウンサーの方たちと違って、インタビューの日を含めてサンデーウエーブへの出演が6回目だったことから、新しい番組に出演するようになるということについて、またどのようにまわりの人たちと番組を作り上げていっているか、進行の手順などはどうやって覚えるのか、などをこれまでと違った方向から聞けるのではないかと思い、質問の項目もそういう要素を増やして作成した。

実際にインタビューをしてみて驚いたのは、Nアナウンサーが全くアナウンサーになるつもりがなかった、ということである。他の3人のアナウンサーの方たちは、大学で放送委員会に入っていたり、専門のアナウンサー養成学校にWスクールしていたり、アナウンサーになるために努力をして、他にも放送局を受験したりされていたが、Nさんは大学時代にやっていたコンピューター関係の会社に内定していたので、「記念受験的な」興味からABC（仮）を受験して、「一般だったら別に、っていう感じがあって、アナウンサーの試験を受けようかなって思ってみたら、こうなった。」という異色の経歴の持ち主だっ

たのである。そのため、他の放送局のアナウンサーの持つ「雰囲気」になじめず、「自分はアナウンサーらしくないアナウンサー」と、アナウンサーという職業の持つ特殊性に悩むこともあるそうである。

ラジオ番組の中にも、アシスタント要素の強い番組や、ディレクターがいないので自分で「好きなテーマで、好きな人を呼んで、好きなふうに時間とか組めて、できる」番組などがあり、番組によって、果たしている役割が違うことについても、教えて頂いた。

ニュースに対しての意見をどう持つかということにも悩んでおられ、ジレンマがあってもなかなか家に帰っても気が抜けないそうである。

話す順番のタイミングについても、私たちが見学していると、とても自然に交代が行われているように感じられたが、「段取りを教えられて、テープ聞いたりして、感じているのをつか」んで、「段取り覚えるしかないっていうか、自分のものにするしかない」そうである。

また女性のアナウンサーが足りない時期ということもあって仕事が忙しく、ストレスの発散がなかなかできず、大変だとおっしゃっていたが、これからも様々な番組でご活躍されることと思う。ありがとうございました。

Kディレクターインタビュー

’ 97 / 9 / 10 ABC (仮) 6スタジオにて実施

Q 入社されたのはいつですか。

A 今3年目だから、90何年だろう、94年の4月、いや95年の4月。

Q 入社試験はどのようなものでしたか。

A 内容とか、難しかった。

Q 例えば。

A 時事問題とか。うん。

Q 面接もあったのですか。

A うん。面接はけっこう難しかったけど、ずばっと「君は法学部だね。」と言われて、「はあ。」と答えると、「ワイマール憲法どう思うか。」と言われて、えーとか思ってね。でもたまたまそれゼミでやってたんで答えたけど。いきなりそんなん聞かれてもなかなかわかんないよなあとか思いながら。けっこう難しかった。

Q 入社試験の準備はされていたんですか。

A うん。放送じゃなくてマスコミに行きたかったから、新聞とかも受けたし。だからまあまあ勉強しましたねえ。でもけっこう好きだったんで、こういう勉強とか。だから苦にならなかったというか。うん。

Q これまでどんな番組を担当されてきましたか。

A うーん、入ったときは“ハリキリワイド”の見習いで、当時“50市町村ふるさとキャラバン”というのをやって、50市町村をラジオカーでまわって、そのアシスタントみたいな感じでまわってたんだけど。あと去年ぐらいからワイド（番組を）持ちだして、“土曜ワイド徳島”とか、“あんたが大将”も持ってるんですけど、これはもう入った時からずっと持っていて、“とんでもナイト”もそうですね、入った時の秋ぐらいから任されて。うーん、あと“シーサイドステーション”は今もそのまま持ってるし、“サンデーウェーブ”も。でも去年のほうがもっと多かったですね。去年なんか7つか8つぐらい持っていて、今なくなった番組もあるけど。今5つぐらい持ってますね。

Q サンデーウェーブのことについてお聞きしたいんですが、ラジオ番組中一番困ったこと、ハプニングはどのようなことがありましたか。

A うーん……

Q 例えば、先週のサンデーウェーブでは、モニターが壊れてしまいましたよね。

A ああいうのは、モニターが壊れたというのは前回は初めてだけど細かいアクシデントはけっこうあるからね。こないだ見てもらったディスクファイル、DFっていうんですかね、あ

れが無くなったときがあつて、あのときはバックアップ用に前の前のディレクターがMDでとってたんですよ。だから急遽（録音）素材を全部MDでだしましたよ。あと日曜日とか情報卓っていう部署があつて、日曜日は人がいないんですね、月曜から土曜日までは2人いるんやけど、あ、土曜日は一人か、でも日曜日はゼロというか誰もいないから、大きな災害が起こった場合とか地震とか事故とか海が荒れてて、高速船が全部運休になってるとかそういう時は担当の別なアナウンサーが、本当は別な仕事があるんだけど、そっちにまわってもらつてあちこち電話かけてもらつて情報を入手してもらつたりもしてますけどね。ただ日曜日に関しては僕が持つてからはまだそういう事態になってないんで。まあでも細かいアクシデントはけっこうありますよ。機械の故障なんかはしょっちゅうでもないけど、うん、ちよくちよくね、細かいのはありますね。

Q ではこの前のモニターの故障というのは、すごいアクシデントだったのですか。

A うん。別にでもあれは放送に直接支障がないから、サブとスタジオとの間の関係だから別に問題にはならないけど。まあDFがなくなったとかいうのは問題外で。あの時はちょっと焦りましたね。

Q サンデーウェーブはどんな年齢層のリスナーを意識しているのでしょうか。

A うーん、30代後半から40代ぐらいまでではないかな。

Q そういうことは番組やコーナーを作るときも考えていらっしゃるのですか。

A うん、考えてますね。

Q サンデーウェーブは反省会があると伺ったんですが、そこでは意見のぶつかり合いとかもあるのでしょうか。

A そういうのはあんまりないですね。やっぱりIさん（アナウンサー部副部長）が中心になってるから、僕はディレクターといつてもまだ経験も浅いし、うん。Iさんは他のワイドとかいろんな番組で経験積まれてるし、だからもめそうになった時はIさんが「これはこうだ。」というふうにまとめてくれるんで、そういう意見のぶつかり合いにはまずならないですね。

Q IさんはKさんよりかなり先輩になると思うんですがその辺は一緒に仕事されてて意識されてる部分は大きいですか。

A うん。まあ僕が頼りにしている部分もあるし。それはでもGさん（アナウンサー）にしてもSさん（アナウンサー）にしても同じだし、やっぱりね、Iさんがいないと普通の放送は大丈夫だけど何かこう起こった時にIさんの指示があつたりすると助かるし。そういった面ではすごい頼りになる人ですね。

Q 次にスタジオ設備とか番組作りのことについてお聞きしたいんですが。スポットCMと番組提供の2つありますが番組提供はスポットCMより金額的にどれくらい高いのでしょうか。

A ああ、それわかんない。営業でないかわかんない。うん。

Q プロデューサーというのはいらっしゃるのですか。

A うちはでもプロデューサーはあんまり、まあ一応部長がプロデューサー的な役割なんやけど。だけどもあんまりそういった役割はないですね。

Q CMのこととかスポンサーのことと、それから出演料とかお金の面のことはプロデューサーの仕事ですよ。

A そういう意味で言うならプロデューサーは部長ですね。部長はこれぐらいギャラ出して予算がこれぐらいあるからこれぐらいでいけとかいいますけどね。

Q じゃあ出演料のことはあんまりKさんはタッチしてないということですか。

A 出演料の額とか。額はスタッフの間でこの人だったらこれぐらいかなと決めといて、で部長にこれぐらいでいかがでしょうみたいな感じです。だから最終的に決めるのはもちろん部長だけど最初の段階はもうぼくらスタッフ、もうだからIさんと僕とで決めちゃいますけどね。

Q 出演料に対してご不満はおありでしょうか。以前3分の出演で1万円払わなければならない状況があったと伺ったんですが。やっぱり考えてしまうと思うんですが。

A うん、まあそういうこともやむをえんとか。あれはでもなんであんなったんだろうな。あれはたぶん（聴取不能）週間の時だったと思うんですよだから特別に予算も出るから、ほんまは記念品だけで済ませる予定だったんですけど、たまたま（聴取不能）週間で、部長がねもうちょと出したれみたいな感じでなんかそういうことになっちゃって、結局そんな額が出ちゃったけどね。だから普段はあんなことないんやけど。たまたまだね。

Q レギュラーとゲストの出演料の違いはどれくらいなんですか。

A いや同じくらいだとは思いますが。

Q 例えばK氏のようなコメンテーターと電話で出演される方、例えばサンデーウェーブでは各地の天気出演される方がいますよね。

A 各地の天気とかは2000円かな。電話のは2000円か3000円くらいだったと思う。

Q スタジオのことについてお聞きしたいんですが。設備で使いにくいところはありますか。

A 下（1F）のスタジオに関して言うとインターネットがほしいんですよ、あそこは。

Q それはどうしてですか。

A 例えば急に資料が欲しくなったときに今だったら二階のアナウンス室の裏に本棚があるんですけどそこまで百科事典とか、誰かアルバイトの子に走ってもらってちょっと取ってきてとか調べてとかコピーとってきてとかってということになるけど、スタジオにあったらねえ、ぱっと調べてぱっともう見ながらしゃべれるし。あったらいいなと思ってるん

ですけどねえ。まあ設備はまだまだ。下のスタジオとか全然だめだと思いますよ。

Q 本で読んだのですが、生ワイドをするには決まった調整卓やモニター何台とか言うふうにある程度基本的なものが揃っていないと生ワイド番組はやれないとかやりづらいというふうに書いてあったのですが。私が見た感じでは、揃っているのかなあと思ったのですが、たとえばサンデーウェーブを放送する時に機材の不足は感じられますか。

A だいたい狭いしねあっこ。機材にしたってちょっと古いと思うしね。でね、下のスタジオに関して言えば録音するスタジオであると同時に生放送するスタジオでもあるわけだし編集するスタジオにもなるわけだから、やっぱり放送は放送するスタジオであってほしいし、別に編集するスタジオとかあったらいいですね。うちスタジオが少ないんですよ。だから編集しようと思ったときにもうスタジオがいっぱいになっててできないとかあります。しょうがないから夜まで待とうかみたいな感じで、結局夜まで待って、それで超勤つけようと思ったら部長に「何だこの超勤は」と言われて。ほんなんあるわけ。

Q 専用のスタジオがあったらいいですね。又、いい機材も必要ってことですね。

A うん。ここのスタジオでも最近DNが入ってMDが入ってちょっと揃いだしたけどまだもうひとつだね。

Q 番組中のアナウンサーとの連絡の仕方についてお聞きしたいのですが、これは緊急時にはどういうふうになっているのでしょうか。例えばモニターを見るようにしてるとかコーナーの切れ目切れ目にはKさんの方をアナウンサーの人は必ず見るようにするとか決まっているのでしょうか。

A 決まってる訳じゃないですけど見るようにしてますよね。別にそうしろって教えられた訳じゃなくて、やっぱりスタジオとサブとがコミュニケーションとれてなかったらぎくしゃくすると思うし。だから先輩のディレクターから言われたのは絶えずスタジオのほうを向いてろって言われたんですけどね、例えば素材出すときもDFとかあるじゃないですか。それでどうしても後ろ見ちゃうじゃないですかガチャガチャしながら。それを見るなど、できるだけスタジオと目を合わしながらアナウンサーのほう向きながらチラチラとこう合わせるようにしろと。そういうこと言われましたね。

Q つまらない質問なんですけど機材の使い方は入社してから覚えられたんですか。

A もちろん。

Q ということは入社されるまでそういう機材についての知識はなかったのですか。

A ぜんぜん。うん、みんなそうだと思うけど。

Q 専門学校というのは。

A ああ、ありますけど、うちはたぶんそんな人いないと思いますよ。

Q 皆さん入社してから覚えられるんですか。

A そうですね。もちろん機材にしてもそんなに専門的にやるわけじゃないじゃないですか。技術さんみたいにイコライザーとかしょっちゅういじってやるようなんじゃないからね。まあ入ってからでも十分いけると思いますよ。

Q 次にラジオの置かれている環境についてお聞きしたいんですが、AMの受信環境が悪くなっていると聞いたんですが。FMに比べて音質的にもきついですよね。

A ああ、そうですね。まあこれはしょうがないと思う。FMには絶対勝てないし、だからFMは地域が狭いじゃないですか、まあ802（FM802＝大阪のFM局＝のこと）とかは結構いけますけど。やっぱりAMは広域で聞けるし聞ける世代層もだんぜん多いし。でも若い人中心に離れていってるのはつくづく思いますね、うん。

Q やっぱり音楽番組はやりにくいですかね。

A やりにくいってことはないけど、でもどうしてもFMを意識してしまいますよね。AMなのにこうなんかDJっぽいしゃべりでこうかっこよくやろうとしてしまいがちですよね。AMがFM化していきそう、寄っていったような。まあどこの局でもそんな傾向はあると思うんですけど。

Q ABC（仮）は今ワイド中心のプログラムですよ、あと天気予報とかニュースとか、やはりワイド中心というのは仕方のないことなんでしょうか。

A うーん、まあ今の流れだったらね。

Q そうすると先程話に出たんですけどアナウンサーがパーソナリティー化してしまうということが起こってしまうと思うんですが、そのへんはどうでしょう。

A うん。それねえ、まあそれはそれでいいんじゃないですかねえ。例えば“とんでもナイト”っていう番組なんか2人だけの、Sさん（“サンデーウェーブ”出演のアナウンサー）とE.Yアナウンサーのほとんど2人だけのしゃべりで1時間放送してしまうんですけど、あれはあれでなにかパーソナリティーのよさっていうのがでると思うしFMにはないAMの強みだと思いますしね。そのパーソナリティーの強みを生かしてるっちゅう点でいいんじゃないですかね。

Q サンデーウェーブに新しいコーナーや新しい企画があったら教えてくださいませんか。

A うーん、今考えてるのは“大人のための通講座”っていうか、より洗練された大人になるためのとあって、対象は大人なんですけど、ワイン講座とかカクテル講座とかチーズ講座とか、なんかシリーズでやろうと思ってますけど、その世界の専門家を呼んで来て。

Q それはKさんのお考えですか。

A ええ、そうだったですね。

Q Kさんが企画をお書きになって企画会議に持っていきますよね。だめになった企画とかあったんですか。

A うーん、あんまりオレ企画出してないからね今、まああったんでしょけど、なんだろうなあ、いや何個かありましたけど忘れちゃいましたね、どんな企画だったかは。でもたぶん「こりゃだめだ」っていわれるような企画だったと思いますよ。

Q SアナとかIアナも企画を持ってこられるんですか。

A ええ、そうですね。

Q アナウンサーが企画にかかわっているというのは、とてもいいことだと思うんですが、他局はそういうことはあまりないのでしょうか。

A あるんちゃうですかね、やっぱり。別にディレクターだけが企画考えるっていうふうに決まってる訳じゃないし、いいと思ったらみんなが考えて持ち寄って決めたらいいし。うん。そう思いますよ。

Q サンデーウェーブ以外でこれからやってみたい思っておられる企画はありますか。

A うーん、こないだ民間放送連盟で中四国の大会に行っとったんですけど、南海放送だったか、グラフ部門で“オーロラになったサムライ”っていうラジオドラマがあったんですよ、それすごいよくできてて、アナウンサーがせりふ読んで、で効果音とか入れながら音楽とか入れながら。ラジオドラマって聞いたことがありますか。

Q むかしはたくさんあったって聞いたことがあります、でも今は少ないんですよね。

A ええ、少ないですよ。それ一回作ってみたいなんて思って今考えてるんですけどね。

Q でもそういうのって視聴者が集中して聞くことが要求されるじゃないですか。

A うん、あんまりリスナーにはね。あんまりうけは悪いんですよ。ああゆうんってだから営業的にもなかなか売れないし、まあドキュメンタリーみたいなもので、うん。でも、まあ一回作ってみたいなあと思っているんですけどねえ。うん、それからドキュメンタリーも作りたいし。

Q その時にやっぱりこう音だからできることをめざすって感じになるんですか。

A そうですね。はい。

Q その画面がなくても……

A そう表現できるものっていうのは絶対あるはずだし……

Q そうすると今作っていらっしゃるサンデーウェーブも部分部分はそういうのを実はねらってらっしゃるんじゃないかと思うんです。“A子のワンダフルピープル”もこう音だから、つまり画面見てたらこうどんくさそうな人かもしれないんだけど、ラジオ聞いてると、すごいどれも奥が深そうな人に聞けて、実に成功してるように思うんですけど。そういうねらいはおありになるんですか。

A ねらいはどうなんでしょうね〜。あれ僕が持つ前に、だいぶん前からっていうか最初からあるコーナーですし、でもそういうねらいもあるのかなあ。

Q 編集の時に誰かが助言なさったりするんですか。それとも全部Sさんがおやりになるのですか。

A ええ。実はいま全部Sさんがやるんですよ。でまあ仕上がりを土曜日の深夜にだいたい聞くんですけど。聞いていながら先週ちょっとね、出しミスがありましたけど。

Q “ワンダフルピープル”や他のコーナーをチェックされるときに、例えば「こういうふうになれば」とか「ここはいけない」というふうに言われたりするのですか。

A うーん、でもそういったことってあんまりなかったですねえ、今まで、うん。

Q 以前のディレクターの方は、バンバン言い回しを注意なさっていたとお聞きしたんですが。

A ああ、前のディレクターはアナウンサー出身の方で、だからそういう、表現にはうるさいというかね、まあよく気が付く人だったんですけど、ぼくはなかなかそこまで気がつかないですよ。そういえばそうかなっていうぐらいで。

Q そういうのもディレクターの役目なのでしょうか。

A まあそうですね。ほんとはそうですね。

Q イヤホンをアナウンサーの方がしていらっしゃいますけどGアナウンサーはしてませんよね。

A うん、あれは、ここですか、これは(ON AIR)です。だから自分の声が聞こえないと喋りにくいという人もいるし、アナウンサーによってボリュームとかも全然違うんですよ。めちゃくちゃ大きくしてないと不安になる人もいるし、E・Yさんなんかはもうめちゃくちゃボリューム最大限にせんと不安になる人でしゃべれん人で、Sさんなんかは低くしないと自分のしゃべってる声と聞こえてくる音のこうバランスっていうんがある程度似てないとだめな人もいるしGさんはぜんぜん気にならないということだと思いますね。でもこれしないとトークバックていって向こうからスタジオに喋った時の声が聞こえないこともありますし、もちろんスピーカーから出るトークバックもありますけど放送中なんかはもうスピーカーから出すより、トークバックだけで「CDとぼしますからね」とか「次、天気予報いって」とか言うときは、そういう時はGさんだったらたぶん聞こえないですけどね。うん。まあGさんが進行するってことはサンデーウェーブに関しては多分ないから、それはそれでいいのかもしれないですけどねえ。

Q 前回の最後ですねえ、なんか時間がおしることをKさんが心配なさっていて、行き違いがちょっとあったというか、伝わらなかったように思うんですが、そもそもGさんがニュースを読みますよね共同通信の、でニュース読み始める直前にIさんの方を見て、でIさんがうなずいて、それでGさんが続けてニュースを読んでるっていうのが録画にあるんですが、あれはIさんがトークバックを聞いていて例えばKさんからニュース1つとぼしてみたいな指示があるということを確認するというような振る舞いなんですかねえ。

A あの時指示はだしてません。

Q そうすると（今回は）指示はだしてないけれども、Gさんは自分がトークバックないから見るわけですよねIさんを、それ（でもKさんが）だすこともありえるのですか。

A もちろん。もちろんあります。

Q ニュースって、あそこにあるのは、重要順ですよ。

A そうです。

Q そうすると最後「1つ落とせ」とか「2つ落とせ」という指示になるのですか。

A もちろん、そういう時はそういう指示になりますねえ。

Q でもそれをGさんに対して口で言ったらマイクに入っちゃいますよね。今回はそのまま続けてうなづけばよかったけれども、「落とせ」と言うときはどうやれば落とすことができるんですか。

A うーん、Gさんしてないから、やっぱIさんを通じてになりますね。

Q IさんはどうやればGさんに伝えることができるのですか。

A えーだから3つニュースの原稿があるとしたら1つめを取り上げるというか、もうこれはいってというふうに。

Q 1つめはでも重要なニュースですよ。

A そうです1つめは。だから多分並べてあると思うんですよ、上から順番に重要な順に、だから3番目の比較的重要なじゃないニュースを抜くか、まそういうことですね。

Q まあ確かに（朝イチで読んだニュースの）繰り返しもありましたね。

A ええ、そうですね。

Q じゃあ中の進行はおおむねIさんがやってるということですか。

A そうですね、はい。時間調整もIさんが冷静に見てるとおもうんですよ。

Q そのKさんが気にしていっちゃった、そのつまりGさんが（“ティーブレイク”での学生への）インタビューの時に時間をたくさん使っちゃったっていう時にIさんが止めなかったのは、何か行き違いがあったんですか、Gさんとは。Iさん別に止めてないですよ。

A ええ、あれはあれでいけると思ったんじゃないですかねえ、Iさんは。

Q その前にもう1曲とばすって指示はIさんにしてるんでしょ。

A しています。はい。

Q じゃあIさんはそれを計算して1曲とばすならまだ2人目のインタビューしても大丈夫というふうに思っていたのでしょうか。

A そうですね。

Q でもKさんはそうは思っていなかったと。

A はい。

Q 2人目の（学生への）インタビューはしないか短くするかと。

A ええ、そういう行き違いはあったかもしれませんがね。うん。

Q たいへんですね。

A まあ、でもそういうのは、まあきっちり伝わるといのはなかなかありませんからねえ、ええ。

Q 緊急の時に一番速く、一番強い伝え方っていうのはあるんですか。モニターが速いとか言うのが速いとか。

A それなら言うのが全然速いですね。だから生放送中に指示出す時は、スピーカーからださずにイヤホンだけで「次、天気」とかもうそのまま言いますからねえ。だから下のスタジオだったら、あのトークバックありますよね、トークバックでセクターがあるじゃないですかイヤホンとスピーカーからでるやつと…

Q マイクチェックの時してらっしゃるやつですか。

A そうですねえ、ええそうですね。うん。スピーカーとイヤホンだけを選択して、向こうから聞こえてくるように「次、天気」とか「次、電話OK」とか言って。こういうふうにしたらもう一番速いんですけどね。モニターとかだったら見ない人もいるし、横向いてる人もいるし。そりゃやっぱりこれが速いです。

Q 話が変わるんですが、Qシートの用語について3つほどお聞きしたいんですけど、ジングルってうのは番組が始まる直前にその番組の宣伝っていうか、サンデーウェーブだったら「なんとかなんとかABC（仮名）サンデーウェーブ」っていうような番組の直前に流れるものって聞いたんですけどそのようにとらえてよろしいんですか。

A うんジングルはもうちょっと意味が広いというか、流れを変える時とかにまあよく使うんですね。これは“ウェーブネットワーク”に入りましたよっていうジングルですね。「ウェーブネットワーク」っていう。でCMの後に一番最後に流れてくるのが、

Q 「STUDIO 3 ABC（仮）」っていうやつですね。

A そうですね。あれがまあ正式なジングルなんですけど、あれはでも、どういったらええんかな、あれはお聞きの放送はABC（仮）のサンデーウェーブですよっていう意味のジングルですね。他にもジングルはいろいろあって、例えば電話インタビューばかりでくる時とか話が続く時とかあるじゃないですか話がずっときてて、でまたこっちの後半部分で続きの話を聞かなきゃいけない時、そういう時は、まあジングル一本うって、ちょっと流れを変えて、また話を聞くっていうふうな。だからまあ曲がわりと言ったらおかしいですけど、まあちょっとほっと一息みたいな。何かそういう合図的なものと捉えた方がいいと思うんですけど。

Q その時に曲がわりに流れるのはどんな音が流れるんですか。

A といいますと。

Q ほっと一息の時などはどんな音なんですか。

A ジングルもいろいろ5パターンあるんです、サンデーウェーブだったら。これは前のディレクターが作ったやつなんですけど。

Q どれを流すかはどうやって決めるんですか。

A ええ、これはもう“ウェーブネットワーク”のジングルですから、これテーマみたいなもんですよね。だからサンデーウェーブで流れるそういう意味の正式なジングルっていいのは、やっぱりCMの後で流れる分だと思えます。

Q それが1パターンで残り4パターンあるわけですか。

A ああ、ありますねえ。

Q そのうち残りの4つのうちの1つが「ウェーブネットワーク」というジングルなんですか。

A いや「ウェーブネットワーク」はジングルはジングルでもその5パターンとは別のものです。

Q さらに別なわけですね。

A はい。

Q SBですけどこれはステーションブレイクの訳で、例えば10時にそごうが開店するから10時にそごうのCMを流すってことですか。

A この10時のステブレっていうのはちょっと意味が違うんですけどね。ほんとは時報の前にくるのがだいたいステブレなんですけどこれは特別な流し方で10時からそごうが開店するからあえて後ろに持ってきてるんですね。ほんとは時報前ぐらいにもってくるんですよね。でもうちは10時からの“えんやこらワイド”とか“土曜ワイド”とかでもそうですし“サンデーウェーブ”もそうですけど、それは特別なステブレで、ほんとの意味のステブレとはまた違うんですけどね。ステブレ契約金はどうなのかちょっと分からないですけどPTとかと同じように差がついてると思うんですよ、スポンサーから貰えるお金に。

Q これはランクとしてはかなり上のCMになるんでしょうか。

A そうだね、時間が決まってるからね。

Q J&BGはよくわからなかったんですがこれはどういうことなんですか。

ジングルアンドピージーですか。ここですかね。これはですね、まあこれはもう意味ないですね。これはジングルレベルっていうかテーマレベルのフェーダーにあわしといて、でSさん天気予報、今日の気象状況管理士さんからです、でBGニュース上げるという技術さんに分らせるためのもんなんですよ。だから最初テーマレベルにあわしといて、つまり最初からBGって書いとくと技術さんがBGレベルで最初からだしちゃいますから。

Q それ音量のことですか。

A うん。音量のこと。だから最初ちょっと大きい音で聞かして、Sさんがしゃべってこう下げるといふ、こう技術さんのための合図ですね。

Q 聞かなきゃぜんぜん解らなかつたです。

A これは多分僕だけだと思ふ。

Q そういう工夫がおもしろいんですよ。

A だから他のディレクターが見ても「なんだこれ」って言うようなもんだと思ふます。

Q 他のディレクターには解らないけど技術さんには解るといふことですよ。

A ええ、そうですね。本当のこと言ふと《テーマアンドビージー》とかにした方がいいんですけどね。“ウエザーインフォメーション”はもともとコメントがあつたんですよ、先生の。

Q ほんとですか。

A ええ。だからそうなつてたんですけど、今これ変えちゃいましたからね。だからほんとにテーマアンドビージーの方が正確といへば正確。あえて言ふならですよ。テーマレベルでだしてってBGはいるといふ。

Q “ウエザーインフォメーション”のところにJ&BGと書いてありますが、これはほんとにテーマ&BGと書くべきだといふことですか。

A ほんとにそうですね。

Q テーマ&BGと書くのとジングル&BGと書くのでは何が違ふんでしょうか。

A うーん、なんだろうな。ジングルってことはやっぱりだいたいコメントが入つてますよね。

Q テーマは音楽だけでジングルといふのは人の声が入つてないとジングルって言わないんですか。

A 正確にはどうなんだろう、でもジングルといふのは普通入つてますね、どれも。

Q 「ABC（仮）」とか「サンデーウェーブ」とかなんとか。

A “土曜ワイドとくしま”とか“えんやこらワイド”ですとか、音楽だけのジングルは聞いたことがないですね、やっぱり。

Q といふことは前のディレクターからこう書き方が引き継がれていふことなんですか。

A ぼくがこれQシート作つたんですけど、前のディレクターは古いQシート使つてましたんで、僕が新しく作り直したんですけど、なぞですね。これはなんでしょうね。だから多分昔用のコメントが入つてた時代からこれ書いてて、で5月くらいからテーマ曲変えたんでそのなごりなんですよ。

Q つまり5月以前は人の声が入ってた。

A はい、そうです。

Q うちにここにいないけどそういうことを分析するのが好きなM君て子がいてですね、「9時18分のジングルはジングルが鳴っていない」と「これをジングルっていう理由が解らない」と主張しているんですが。

A そうですね。これもジングルじゃないということよですね。

Q これを機械の人が見て解らないと質問に来るっていう打ち合わせの時間が前もってあったりするんですか。

A それはないですね。

Q 機械の人は見れば解るといことですか。

A ええ。サンデーウェーブのみなさんは長いですから。技術さんも持ち回りでずっと回りますから、僕より長い人いますからね。だから解ってますねえ。

Q 機械の人は交代交代でいらっしゃるんですか。番組の中でも変わってらっしゃいますよね。

A そうですね。9時30分から変わりますね。

Q あれは指名とかできないんですか。

A もちろんできません。あれはもうローテーションで決まってて技術運行部の中で決まってるもんですから、だから9時30分から誰が来るのかそれもわからないですからね。

Q じゃあ打ち合わせもなにもないわけですね。

A そうね。例えば“サンデーワンチャン”とか“サンデーコンサート”とかちょっと外でやる時はもちろん前もってやりますけど、この“阿波の歴史シリーズ”とかだったらスタジオに先生がきてしゃべるだけだから、特にカウンターの動きがないので、普段どおりということをやりますけど。

Q ABC（仮）の場合はあまり他局との競争がないと伺ったのですが。

A そうですね、いいことではないと思いますよ。

Q 例えばある局では視聴率が壁にズラーっと貼ってあるらしいですね。

A まあ、それもそれで僕はあんまりいいことじゃないと思うんですけど。でも競争がないってのもねえ、やっぱりのほほ〜んとしてしまうしね。そうなるあんまり新しい企画考えてどうこうやろうという勢いがおこらんし。それはそれでいかんことやと思いますよ。ただ視聴率、視聴率って騒ぎ過ぎるのもどうかと思いますけどねえ。

Q 難しいところですね。

A うん。

Q そのSKY B でしたっけ有料電波だけ音だけ流していたりしますが、ぜんぜん競争相手じゃないわけですか、あんなの。

A どうなんでしょう。まだそこまでだれも意識してないんじゃないかなあ。

Q 新聞報道によれば、しばらくすると、衛星ラジオ放送ネットがくるそうですね。2007年には。

A はい。うーん、あれでも怖いですねやっぱり。

Q 車の人は簡単に聞けるわけですからね。あれは有料放送ではないですよ。言ってる事聞くと。

A そうですね。無料になると思いますね。

Q じゃあ全国の地方ラジオ局はどうなっちゃうんでしょう。

A そうなんです。地方は地方独自の情報があるとか言ってますけど、それも怪しいですね。まあみんな全国の東京のね、あっちの方が内容的にも濃いですし、おもしろいですし、まあ脅威ではありますよね。

Q じゃあ時間も過ぎたようなので、ありがとうございました。

A ほんとにわかりましたか。なんか支離滅裂のような、なんか不安だなあ、僕。

Q いえ大変参考になりました。ほんとにありがとうございました。

A いえいえ、こちらこそ。

Kディレクターインタビューについての感想

このインタビューは約1時間にわたって行われた。話は入社から現在までのKさん自身のことになり、サンデーウェーブのこと、専門用語の説明、そして現在のラジオ環境にまで及んでいる。とても中身のある話が聞けた。

アナウンサーとコミュニケーションをはかるために、常にスタジオの方、つまりアナウンサーの方を見ており、時間がおしたりしていると“曲カット”とかの指示を出すのだが、そういう「時間おしてるな」とかいうのは、アナウンサーも分かっているから、そこでディレクターがどういう指示を出すのか見る。ディレクターとアナウンサー、どちらもが常にお互いに注意を払っており、それはもう暗黙の了解で番組が成り立っているのである。ディレクターの指示をイヤホンやモニターで伝えるのだが、ディレクターの意図している指示がきっちり伝わるといってはなかなかない、と言っていたがそれでも番組がスムーズに進行するのは、やはりIさんがスタジオ内での時間管理をしているからであって、Iさ

んの存在の大きさ（決して欠かすことのできない存在）がここでも伺われる。

『放送ハンドブック』等には、最近ではパーソナリティー化して生ワイド番組が進んでおり、アナウンサーが企画を出したりしてディレクターの役割を兼ねたり、機械操作が簡単になったため、ディレクターが機械操作も兼ねたりといったように、アナウンサー、ディレクター、機械操作をする人の区別がなくなってきた、と書いてあった。ワイド番組が中心となると、ライブ感が重要になり、となるとパーソナリティー中心になるからで、‘東京や大阪ではパーソナリティー化が進んでるけどどちらローカル局だからそこまでいってない’みたいなことをABCのアナウンサーは言っていた。こっちのほうでは（徳島）競争も激しくないから、生番組ワイド化もそんなに進んでいない。だから、ディレクターは、ディレクター、機械操作する人は、機械操作する人というようにはっきりと分かれておりディレクターは機械操作は全く行っていなかった。

サンデーウェーブの中の、“吉野川紀行”の編集は、以前はGアナウンサーがしていたのだが、ディレクターが変わって、Kディレクターになってからは、「自分がやりたい」ということでKディレクターが担当しているという。それはすごい意気込みというか、やる気がみられる。それでこれから作ってみたいもので、ラジオドラマを挙げているが、ラジオドラマはリスナーに集中力を要求するからリスナーうけは悪い、ということを知っているにもかかわらず、それを作ってみたいというKディレクターは、自分の腕試しをしようとしているのではないか。“ラジオ”っていう、音だからこそ表現できるものを求めて、大きく言ってしまうと“夢”みたいなものをいつまでも持ち続けて欲しい。そうすることによって番組がどんどんとよりよいものになり、また自分自身の向上へとつながるだろう。ありがとうございました。

コメンテーターになったきっかけ

コメンテーターになったきっかけですか？えっときっかけはですねー、あのー徳島大学総合科学部H先生に紹介されて昨年の12月の、えーすいません、日曜日はカレンダーで見てもらえば分かるんですけど、1日か、2日。1週目にあのー、最初に出て、その後都合がつく限り向こうのお誘いには応じるということで、今、コメンテーター4人レギュラーがいますので、えーだいたい4週に1回、月1回のペースで出てます。で、これはあのー、自分で確かめたわけじゃないんですが、由来に関してなんですけど、昔徳島大学にあのーT先生っていう先生がいて、社会学の教員で、今私のいる、あのー1号館の2Fの中棟の1224室にまえた先生なんですけども、T先生がまえ朝日ジャーナルの編集長で、そのー何ていうんですか。そのーマスコミ人といいますか、えーこういうのを何ていうんでしょうか。えーマスメディアの人だったので、それであのーそういう関係が生まれたんだと伝え聞いております。もうすこし詳しくいいますとO先生がいた時にはO先生も出ていて、T先生も出ていて、で、OさんもTさんもいなくなったんであれなんですよー。そのー窮屈になるわけですよ。そのー日曜の朝起きるとね、日曜が休日でないみたいになっちゃいますから、交替交替で出ようということになったのだと思います。

以前もラジオ番組に出演してたかどうか

以前はこういうラジオ出演（レギュラー）はやってなく、あのー皆さんがお出になるようなかんじでゲストとして出たりしたことはありますけど。あと、テレビには1回出たことがあります。1回かな？1回だけですかね。ずいぶん前です。15年ほど前ですけども。高校3年の時ですけど、テレビ朝日という局がですね、花園大学で初めて入試問題をマンガを込みで出した時がありまして、それを、そのー扱った時にあのー上野高校の人たちと一緒に、自分は都立青山高校だったんですけど、高校生代表ということで、コメントしたことがあります。学内の番組とかなら他にも出たことがあります。

コメンテーターの役割についてーその(1)ー

コメンテーターの役割ですか？2つあって私が他のコメンテーターと違った役割、もう1つは番組の中でコメンテーターが期待されている役割。始めのからいいますと、私はさっきも言いましたように、去年の10月に初めて徳島に来ましたので、非常にくだらないんですが、部外者としてのコメントを言える立場なわけですよ。で、皆さんその新聞等を読んでもお分かりのように、そのー、外国人は日本についてむちゃくちゃいう権利があるじゃないですか。部外者として。おおむね間違ってるんだけど、みんな、まあーそういう面もあるかって思って聞くわけですよ。徳島県民ではないという扱いをされてまし

て、他の県では違うとか、東京では違うとかね、そういう言い方を要求されることがあります。「東京のことは長年住んでお詳しいでしょうが、例えばどうでしょうか。」とか。例えば（1997年の）4月末に出た時には徳島の道路交通に関して、信号機が黄色で点滅してるじゃないですか。赤-青-黄じゃなくて、黄色点滅-赤、黄色点滅-赤、の2種類ですよ。ところどころ。あの一全部じゃないですけど。それはその、危険だと主張しましてですね、黄色で止まらない習慣がつくって。まっ、身勝手な意見ですけども、なにも証拠もなくいってるんですけど、自分がそうだって。半年の間にだんだん。始めは黄色でブレーキふんじやうわけですよ。黄点滅で。でも、他の（車は）全然どれも止まんないんですよ。青と同じでつっぱしって行って、自分もだんだんそうなって、普通の信号、つまり、赤-青-黄になる信号でも黄色でとっぱするようになってちやうですよ。あの一、徳島県の車あれですよ、赤でも突破してますよね。赤の初めの3秒くらい。で、危険だ、なんていうときに、「他の県では違う」。でも、そうするとこれ嘘なんですよ。あの一、全国50都道府県のうち多分隣の県、香川県も黄で点滅してるんじゃないでしょうか。その一何県かはあいう方式をとってるんですよ。でも東京から来て、東京はそうでないという言い方で、他の県では違うっていう、そういう意見はなかば要求されているという。えーくだらないことを言わないように気をつけながら、なかばそれによって、言いたいことを言っているということですね。

コメンテーターの役割について-その(2)-

もう1つはあの一この間徳大の学生さんと一緒にIさんのインタビューにいったんですけども、その時にIさんが言ってたように、基本的にコメンテーターには一般人的意見とは違うことを言ってもらって、一般人的な感想はアナウンサーが実感的にフォローするっていう、そういう組合せで番組ができています。従って、その一、辛口っていうかあの一、気のきいたこととか、人と違ったこととか、そういうことを言うように望まれている。そういう2つの側面がある。今ほどIさんの意見を紹介して違った発想をとるって言ったんですけども、コメンテーターとしてはそれはその一ガス抜きというかですね、その一、あまり知的な進歩がないっていうかですね、よいやり方じゃないって思ってるんですよ。だってAという意見とBという意見があって対立してますね。でも、Bという意見の人もAという意見があるということをその一、心得ていましょうねっていうのは、その一、そのこと自身が人々の実感そのままであってですね、ガス抜きであって、人をその一、新しい世界には導いてはくれないというふうに思っていて、古い言い方で弁証法っていう言い方があるんですけども、AでもBでもなくて、C、新しい言い方をすればポストモダン、あるいはその一、脱構築っていうのもよい、あの一つまり、人々がA対Bっていう枠組みで考えているときに、その外側の意見をなるべく言うように自分は心掛けていますけど。つまり番組に出ることは私にとってたいへんよい経験なのです。私もまた日常生活を基盤として人々と同じ世界に生きていてA対B、例えば「厚生省は悪い」と、「厚生省はあやまって叩かれるほど人々に期待されている」というね、「厚生省汚職問題」では、そういう2つのよくある意見の対立のどちらかをもってるわけですよ。で、なるべく、そういう、その一、常識的立場を越えた問題の把握の仕方をしようと思って、朝8:30に打ち

合わせに行きますし、ひどい場合には、聞かれた瞬間に、そういう時の、その一、常識的な答え、AでもBでもない別の枠組みの答え方をしようと瞬間的に考える。簡単に言えば“あまのじゃく”なんです。けども、あまのじゃくは別にその一、市民の人と違うことを答えるっていうそういうあまのじゃくじゃなくても、問題の枠組み自体を作り直すようなですね。例えばさっきの厚生省汚職の問題でいえば、当然その一、厚生省が良いか悪いかの外側に私たちが政治をです。その一、小さく矮小化して、官僚主導で国家体制を作ってきたっていうことがあると思うんですよ。で、厚生省なんていうのは、ずっと二流官庁でね、財政的にも弱いし、あの一スーパーエリートは大蔵省いっちゃうし、暗い気持ちで仕事している人たちだったんですけど、その人たちがたまたま、老人が増えて、社会保険費が増えて、日本でその一省庁が扱うお金では今 トップになってるんですよ。他の省の予算よりも、厚生省の予算が、20省庁で一番多いんですけども、あの一そういうその一主要官庁になってしまったという問題が、それにその、厚生官僚が文化的に蓄えてきたものが追いついていないっていう問題があると思うんです。だから問題を良い悪いじゃなくて、そういう政治と官僚制度問題、あるいは同じ官僚制度の中でも誇りある大蔵官僚、そんな500万や1000万(円)おごられたからって、おれはその一自分の使命をゆるがしにしないんだって、大蔵省の人は伝統を作ってきたわけですよ。あの人たちは接待で何十万円の夕食を食べても、そんなことは先輩もずっとしてきて、自分たちもしてきてそんなことで、おれたちの判断はゆるがないんだと自負を省庁で作ってきたわけですよ。厚生省にはそんな自負がないんですよ。今までそういう接待を受けてこなかったから、そういうその、省庁文化問題ってな形で、なるべく新しい問題を提起するようにしてるんですが。

厚生省ネタが多いわけ

えー先ほど厚生省の話をしましたけど、私が厚生省ネタが多いのには背景があって、知られていないんですが、私、厚生省史の研究というですね、その一文部省科学研究費の研究をずっとやってたんですよ。3年計画で。だからその一厚生省史ってね、厚生省ってできて、昭和13年にできて50年経った時に50周年記念事業で厚生省史作ったんですよ。すごい分厚い本で。多分全国の研究者でそれを通読した人っていうのは50人いないと思うんですけど。その一50人中の20人が集った厚生省史の研究っていう文部省科学研究費、その一複数の大学の研究者が集まって3年計画でやる研究費のメンバーだったんで、その一、素人じゃないという自覚はあって、あの一、えっともうすこし言うと、社会学で社会福祉やってる人はいっぱいいるんですよ。けれども、そういうときにそういうね、省庁の側の資料をちゃんと読み込んでる人はほとんどいなくて、というのは、社会学っていうのはその一、社会運動の味方として活動してた部分があってですね。その一、生活保護をもっとよこせとかですね、肺結核の人にもっと無料補助をしるとかですね、社会運動の人に寄り添って社会福祉問題ってのはこう一、社会学者は多いんですけども、私と私の指導教官であった社会学の教員はそれをその一省庁側、役人側から分析する必要ってのを訴えていて、というのは、その背景には日本の国ってのは官僚が支配してるんだっていう前提があるわけですね。運動なんていうのはその、官僚がそこからその一、ある立場をく

みとれるならくみとる形で利用してるだけで、実は官僚主義でやってきたという国家に対する理解があるんですが、それでやってる数少ない、その一、役人組織側から研究してる数少ないメンバー、のうちの一人、同世代では私しかいないという自負で、それは積極的に発言するようにしてます。リスナーに知ってもらっていうか、みんなね、知ってはいると思うんですよ。その一、役人が有能でね、役に立ってる人で、汚職の人がいるなんていうことでね、日本のその一官僚機構がね、全体が腐敗しているわけじゃないなんてことはみんな知っていて、話題にしないじゃないですか。だからその一、問題は、知った上で先を考えることであってね、その一汚職の人がいて汚職の人が悪いとかね、それがその一針小棒大にいわれてなんか厚生省全体が悪いみたいというのは、その一我々の欲求不満解消にしかならなくて、なんらその一省庁改革の話になんにもつながっていかないと思うわけなんですよ。だから知ってもらいたいってというのは嘘なわけ。みんな知ってるのに、なんでその一知ってることをもとにね、まじめに考えようとしななんだと。その一大声で人を非難するとき気持ちいいじゃないですか。その場のその気持ちよさばかりを求めて、その一人々もそのマスコミもですね、その場限りの議論をしてるのが不愉快だから、だから半分はマスコミ人向けに言ってるんですよ。ということなんですけど。

一番最初のコメンテーター出演で困惑した点

一番最初のコメンテーター出演での困惑ですか？困惑はいくつもあって、うまくいったことも、困惑はあったけれども、うまくいったこともうまくいかなかったこともあるんですけど、基本的には慣れていないので震えてしまう、緊張してしまうということがあって、えーっと、いやー、昔はもっと根性がある人間だと思ってたんですけど、最近、学会とかで質問すると自分の声が震えてるのが分かって、いやー、ナイーブでかわいいんだなーなんておもっちゃうんですけど。僅かに声は震えていたと思いますね。けれども2回目からは震えなくなってそれはその一、最初自分の声の震えをいかにおさえて発話するかっていう、震えているのは自信がないからではなくて、力強い、その一大衆の支持は受けないかもしれないけれども、その一立場的な意見を要求されてると思うんですよ。それにふさわしい声があると思うんですよ。だから、紹介のされかたをみても分かるように、ことさら大学の職名をIさん（アナウンサー）は冒頭とおしまいに言いますし、その一番組全体に権威付けする素材として使われていますので、その当人が「す、す、す、すいません、自信がないんですけど」ってしゃべるわけにいかない。そういうこともあって、始めは声の震えが気になってほんの僅か震えたと思うんですけど、2回目以降からは震えずにできてるってのがまー、一番気をつけていること。で、他に困惑したことは、いつ自分がコメントを求められるかってことが分からないわけですよ。Bさんていうですね、“エコノファイル”っていう番組を（サンデーウェブの）中でレギュラーをもっている元徳島新聞の記者の人がいるんですけど、Bさんの話の時は僕、全然関係ないと思ってたんですよ。で、もしかしたらふられるかもしれないと、ぼーとしてるときにふられたことがあって、で、なんでこんなところでコメントしなくてはいけないのって思って、徳島の観光のことだったんですよ、その週が。で、徳島の観光のことで、「いや、徳島はいいところです。東京（近郊）ならば千客万来であふれかえっているんで、お客さんが少なくて、従ってあまり

観光化もされてなくって、徳島のもってる観光資源はものすごく豊かだからまだまだ生かせる」ということを口から出任せで言ったんですけど、話は、突然いつふられるか分からない、いつ席を立てていいか分からない。始めはトイレに行くときも「今行っていいですか？」って聞いてたけど、その次の瞬間に生放送になっちゃうかもしれないじゃないですか。全然分かってないんですよ、僕。で一、それは困りましたね。だから途中Sさんがしゃべる“ワンダフルピープル”ていうところかGさんがしゃべる“吉野川紀行”てところは他の人は基本的に席を立てるんですけど、始めはその時も席が立てなくて、やっと最近そこはまあいなくていいんだって分かって席を立てていた。というのは、一番最後にコメントをきかれるときに、(録音素材を中心につくられている)“ワンダフルピープル”や“吉野川紀行”でもコメントしなくちゃいけないのかなって思ってたんですよ。だからずっとなるべくいたんですよ。で、どうもね、それに関してはコメント期待されてなくて、最初のニュースの時とかエコノファイルの話の時とか、メインのゲストの話とかでコメントすれば十分だと分かったので、最近は席を立てたりすることもあります。

今まで一番困ったこと

今までで放送中に一番困ったことはですねー、失敗してしまった時のフォローですね。地元ネタをふられた時、吉野川第十堰で、ほくだいたい“じゅうせき”っていうの知らなくて“じゅっせき、じゅっせき”ていっていて、“じゅうせき”ってフォローされちゃうんですけど、番組の中で、あの一第十堰のときに、だってなんにも私考えてないわけですよ。で、どちらかといえばね、私あってもいいって思ってるんですよ。で、これ分かんないんだけど、ABC(仮)ののりは、その一6:4ぐらいで十堰に反対してるかんじなんです。社の方針と違うわけですね。で一つまり、第十堰あってもいいっていう主張を言えば社の方針と違ひ、理由を聞かれれば理由なんてないし、「あつたっていいじゃん」って思ってるだけで、困っちゃうわけですよ。で、失敗しちゃったのは、その一前もって朝打ち合わせで、「それは僕答えられませんから。」って言ったのに番組の中でふられちゃった時に、別に怒ったわけじゃないんですけど、困ってしまってますねー、「いや、十堰の問題難しいですよ。Iさんどう思いますか。」ってふっちゃったんですよ。後で考えれば当たり前のことですが、Iさん答えるわけにはいかないわけですよ。Iさんは、日本のマスコミってあれですよ。アナウンサー中立っていう前提があつて、最近でこそキャスターはいろんな意見言うようになったんですけど、放送の会社側の方は、そういう政治的イシューに関して、意見を言わないのが前提じゃないですか。まして、この、第十堰、もめてる話でIさんが「私は個人的には反対なんですけどー、」とか言えるはずがないじゃないですか。Iさん困っちゃって、ちょっと沈黙があつて、「いやー難しいですね。」て話でふられて、私も「難しい問題だとは思いますが、」まー、くだらないことですよ、その「慎重に考えてやっていくのがいいと思います。」ていうことでおわりにしたんですけど、その時は困りましたね。なんか悪いことしちゃったなーて思ったけど、謝りもせず、今にいたっています。地元ネタが困る理由は二つありまして、一つは知識が全くないという問題と、もう一つは地元ネタは利害関係がですね、複雑なんですよ。つまり、第十堰は応援してる人も反対してる人もいる。まっ村のダムも応援してる人も反対してる人もいる、そういう問題に

対して意見言うのは危険ですよ。まして、無知なことを一言でもその一、ばれるようなかたちでいって、ある意見を言うと、その一、反対派の人から大学に文句がくるんですよ。その一あいつは徳大の教員だけれども、全く事実認識を誤って、公共の電波ででたらめなことを言っていると。同じでたらめなことを言っても全国ネタだったら非難されないんですよ。この放送はご存じのように徳島県中心の放送ですから。だからちょっと甘えてるんですが、地元ネタは答えにくいっていう部分があります。他にも困ってることはたくさんありますね。えっとね、でたらめ言っちゃったっていうのは今でも心に悔いがありますけどね。あのいや一、困ってることだらけでさ一、吐いた言葉はさあ一、もどってこないからさ一、いや一、人間が悪くなっちゃうっていう不安はありますよね。この間、私、市バスのことで意見を聞かれて、赤字路線を減便していったら、その一どンドン乗る人も利便性が悪くなって減って、また赤字路線が増えて減便が必要になって、縮小再生産でぜんぜん解決にならないから、あの一バスゾーンを作るとかですね、ある路線については黒字転換が無理なら廃止して、タクシー乗車券をその一病院行くとかその一福祉が必要な人には配るっていうねそういう対策をとりなさいって言ったんですけど、後で新聞を見るとね、いや、まっ、その瞬間にもう気付いてたんですけど、これはその一詰めてない主張だなんて思ったわけですよ。その一市民の使う交通機関が黒字でなきゃいけないって必ずしもいえなくて、そういう赤字ならば喜んでかぶるっていうのが地方自治体だっていうふうにもいいと思うんですよ。その一市役所が提供すべきその一、一番重要なサービスかもしれないわけで、赤字覚悟で、で、利用者が減らないように、むしろ市の補助金を多めに投入して利用者に喜んでもらうっていう、そういう政策がありうるとその瞬間も思っていて、でも、ほら一、その一、両論言うことは要求されていないわけですよ。二つ立場があるっていえなくて、その場合こう一、口をついてでてくるのは直前の打ち合わせで「それじゃ一その一、縮小再生産だ」って言ってたから、その一半分はそういう合意のもとでそういうコメントをしてしまったんですけど、今となっては自分の立場は違っていて、市はそういうところに、その後朝日新聞にもその一ドイツの例とか載っていて、日本の国内の他の市の例も載っていて、大量にお金を投入して、無料でバス運行してる市もあるし、50円とか100円で運行してる市町村もあって、そういうふう書いてあったから、今の立場はこっちなんですけど、こうやって自分の立場が後々変わったことと、あの放送で言った立場が矛盾したままになってる、あるいは、市の人にとっては不愉快きわまりないことをやってしまったわけで、後で追求された時に自信を持って抵抗できない。私は、あの一丁寧を考えずにでたらめ言ってしまいましたって本当謝らなきゃいけないんですけど、そういうことをきっと謝らないまま（過ぎていくんですよ）。

苦手な分野の切り抜け方について

苦手な分野の切り抜け方ですか？これを聞いてくださいって話なんですけど、基本的にはアナウンサーの顔色を見るっていうやり方ですね。もっとひどいことを言えばですね、打ち合わせの時にですね、その一どういうふうにコメントしてほしいかっていうのをにおわせるんですよ、向こうの人が。こういうトーンなら、いやおっしゃる通りですって反応して、ちがうトーンなら、ちょっと顔をしかめる、その通りに答えているわけじゃないんで

すけど、要求されている方向はこの方向なんだな—っていうことを顔色を見たり、打ち合わせの様子を見たりして、その通りに答えているわけじゃないんですけど、参考にして答えたりしてます。あと、ふられちゃ困るときってあるわけなんですよ。今ふられたって何も考えてないよって。今考えてることはくだらなくて言うと恥ずかしいとかですね、あるわけなんですよ。そういうときはやっぱりあたらないようにIさんの方を見ないとか、準備してないってことが明らかかなようにお茶を飲むとか、あたらないように身体メッセージは出すようにしてるんですけど。

コメンテーターする上でのプラス面

コメンテーターする上でのプラス面ですか？つまり本番なわけなんですよ、番組って。だから失敗もするけれども、本番だから自分の頭がまわるってことあるわけですよ。その一皆さんと違って、で、大学院生時代とも違ってその一、試されるって機会が減っちゃうわけですよ、教員になると。学内に他の先生はいるけれども、その一専門が違えばね、人の研究内容については決して直接はコメントしないっていうのが大学の秩序ってものなわけ。そうするとその一皆、天狗になってくわけですよ。番組に出ればね一、その一、やっぱりむちゃくちゃなことを言えばFAXとか電話で非難轟々になっちゃうし、本番なわけですよ。自分が試されるわけですよ。で、そういう機会は努力して作っていかなくや本当はいけないわけですけど、それが与えられている、その一、自分のその一これも古い用語なんですけど、知識人としてのその一、生きていく、こう一、大事な条件になってる、生きていく大事な、なんです、その一なくすべきではない生活の一部になってると思いますけど。それと、ABC（仮）に出てるからっていうわけではないんですけど、えっと、常に、ありとあらゆることは研究ネタになりますよ。一番最初Qシートにメモしてるのを横から覗きこまれて、“（ディレクターが）Cueを出してるのをアナウンサーが見てる”とかその一書くわけですよ。覗きこんだ人が「こんなこと書いてる」とか言うわけですよ。そりゃ、その一、半分は警戒なわけですね。自分たちが呼んでるゲストが、なんと自分たちが、観察されていたんだっていう。自分は社会学者だからどこだって観察してるんだっていうですね、その一、意気込みはありましたけど。ありとあらゆることは、その一、自分は仕事に使おうとおもっております。

コメンテーターする上でのマイナス面

コメンテーターする上でマイナスの面もあると思うんですよ。それは悩みでその一、関心が拡散してしまっていて、ありとあらゆることに首をつっこんで、専門研究者としてのその一、仕事をしなければいけないっていう意気込みが薄れる、そういう問題があると思いますね。番組で気のきいたことをちょこちょこって言うだけで、自分がなにかこう、生きていくかがあるようにおもってしまうんじゃないか。あの一そういうところに全く出ずに学会でその一ある狭い領域で評価されることだけしか自分には生きる意味がないんだ、って自分を追い込まないと研究なんかできないっていう面があるとおもうんですよ。いわゆるこれは、地方文化人への墮落の道でもあるという不安があって、それはその一、どこか

でやめるなりしてですねー、あの一、(墮落の道に) 陥らないように気をつけないといけな
いなおもいますけど。

コメンテーターする上でのおもしろさ

コメンテーターのおもしろさはですね、いろいろな人に会える。まっアナウンサーも同じで
すけど、いろいろな人に会えるってのはたいへんおもしろいことですね。あの一とりわけ県
に関わりのあるいろいろな人に会えるってのはおもしろいことであって、この間あの一、“ワ
ンダフルピープル”に出た女性の人は徳大工学部の教員の奥さんなんですけど、北島町
の町立図書館でその一世界の絵本を読む会っていうのをやってまして、で一、もうね、い
かにもそういう人なわけですよ。その一、おしゃれで、それできりっとしていて、すっご
く頭がいいのね。あの一“ワンダフルピープル”は録音も流してるけども、その場に来て
からしゃべるってときに、その一最後にね、北島町立図書館で世界中の絵本を読む会をや
っていてね、その一「言いたいことありますか」って(曲が流れている間に)言ったとき
に、もう瞬間的に奥さんは、その一、「県とかにね、批判的なことを言ってもいいです
か。」ってお聞きになって、「かまいません。どうぞ言ってください。」ってSさんが言った
ら、実に理路整然と、企画を通すことがたいへんだと、その一、本当に説得力をもって言
えて、そういう人たちが、都市にはいっぱいいて、地方にはあまりいないって思ってたん
ですけど、あーいるんだっていうふうに思うし、チャンスがあれば何かこういう人たちの
企画にその一、参加してみようとも思うし、なんですか、えっと、いろいろな人にあえるっ
ていうのは、Sさんの場合は全国的に有名な人に会えるっていったんですけど、僕の場合
は、その一、徳島県内の特別優れた人に会えるっていうのはおもしろいところ、喜びで
すよね。

K コメンテーターとしての役割

そのね、僕らはその一社に雇われてるわけじゃないわけですよ。常勤として。だとする
のならば、その一、そういう立場を生かしてですね、番組のマネリ化をその一、阻止す
るようなですね、そういう立場での協力者としてあの一、参加できたらな一、って思っ
てますね。あの一、この、“ABCサンデーウェーブ”っていう番組自身その一、社の企画と
いうよりは、アナウンサーのIさんとSさんの企画としてできていて、それは大変すぐれ
た企画だったと思うわけですよ。その一、リスナーには老人が多いですけど、老人向けに
はしないとかですねー。地元向けの放送なんですけど、視聴率なんか気にせず全国ネタ、
例えば、“マンガと文化”なんてそういうことも扱うわけで、志は高いんだけども、ほっと
くとね、だんだんマネリ化していくわけで、半分はそういうIさんたちの希望を叶える
ように、もう半分はIさんたち自身がマネリ化することを、その一、ちゃんと妨害して、
もともとの高い志に戻っていけるように、などというようなことは考えていますけども。
あと、これはぜひとも強調していただきたいんですが、徳島大学ですねー、名をそこで
宣伝してるわけですから、まーあまり本気じゃないですけども、受験生が増えてですね。
あるいはまー、大学の存在感が県内で示せるようになっていようなことは、その一冗談じ

やなく思ってる部分はありますよ。

Kコメンテーターインタビューについての感想

番組中でいつもキョロキョロしているのは、決して落ち着きがないからではなくて、人間観察、例えばアナウンサーの視線を追ったり、ディレクターの指示を見てアナウンサーがどのようにそれに反応しているか、とか、あるいはアナウンサー間での“あ・うん”の呼吸を見てとったりとなどと、ただ単にコメンテーターとして出演しているだけではなく、実はそこでも研究を行っているという。日常生活においても、ありとあらゆることが研究ネタになると言っていたが、どんな小さな事までをも研究材料にしてしまうというのは、さすが社会学者であるなあと思った。

本人自身も言っていたけど、「私よく詰めてない主張を言ってしまって、後で意見が変わってもどうしようもないんですよ」とか「私よくでたらめ言っちゃうんですよ」例えば、上記のインタビュー記録の中で、大蔵省は何も悪いことしてないんだって、大蔵省を誉めているようなニュアンスだが、実は大蔵省汚職も問題になっているし、またこの部分のコメントでKコメンテーター自身がA対Bに陥っている。これはKコメンテーター“コメンテーターとしての役割”に反しているのでは……。あるいは吉野川第十堰問題に関して、以前は、「あったっていいじゃん」と、まあ言ってみれば賛成派だったのに、今では6：4ぐらいで反対派だそう。人間誰しも意見が変わるということはあって当然だが、しかしコメンテーターであるからには、一旦発した意見を最後まで責任を持って貫き通さなければいけないのではないか。そういった意味でコメンテーターとしての慎重さに欠けているように思える。

Kコメンテーター自身の“辛口”っていう意味は、人や意見を批判するというのではなくて、人と違った意見（一般的な意見はアナウンサーが言う）を言うことであって、それは、なかば“ABCサンデーウェーブ”側から要求されているのだと言う。それは今年の年賀状にも表われていて、Iさんから「今年も辛口のコメントよろしく」って書かれていたそう。 “ABCサンデーウェーブ”では、コメンテーターに辛口意見を言ってもらって、それでその意見に対してアナウンサーが中立的な意見を発して、辛口コメントを中和するという形で、番組が成り立っている。そういう構成をとっているからこそリスナーに、より説得力を持たせるのだろう。

大学の教員であるだけに、さすが話すのが上手く、事細かなところまで、丁寧に話してくれた。こっちが1質問するのに対し、3ぐらいの答えが返ってきたので、インタビューは思ったほどスムーズにいったので、その点は非常にありがたかった。

インタビュー全体についての感想

社会調査実習のインタビュー班として、アナウンサー、ディレクター、コメンテーターの計6人の方々に、インタビューをすることになった。しかし、何を聞いたら調査として有効なインタビューになるのか、ということがわからず、単なる素人がわからないことを質問しただけ、というようなもので終わらないように、6人の方それぞれへの質問の内容を考えるのに、3人で四苦八苦しした。

始めの頃は、インタビューをスムーズにするための下準備（番組の名前、コーナーの内容、放送曜日、時間など）が不十分だったり、機材のチェックに見落としがあったり、インタビューの中で話を進めるのが下手だったり、終わってから反省することが多かったが、回を重ねるうちに、少しではあるが上達したのではないかと思う。

一応メインのインタビュアーを一人、メモとり、機材調整に残りの二人、と先生という構成でインタビューに臨んだが、メインだと思えば緊張してしまい、途中でつまってしまうことが結構あった。そんなときは、周りの人たちがすかさずフォローをしてくれ、その時に出た新しい質問によって思いもよらなかった話が聞けたりした。

「聞かなければわからなかったことを聞くためにある」インタビューといえるまでになったかどうかには、まだまだ改善の余地があるが、お話を聞かせていただいたのが、アナウンサーという話すこと、インタビュー（すること）のプロだったことが大きな助けとなり、少しは調査に貢献できるようになったと思う。

質問の順番が前後してしまったり、疑問に思ったことをうまいタイミングで聞けなかったりと失敗が多く、また稚拙な質問にも、根気よく答え様々なエピソードを聞かせて下さった皆さんに感謝したい。ありがとうございました。

参考文献

日本民間放送連盟編、1991、『放送ハンドブッカー文化をになう民放の業務知識一』
東洋経済新報社。

前川清次、1989、『Audio Visual 時代のサウンドミクシング』 兼六館出版。

参考資料

ABC（放送局、仮名）ラジオ番組表、1997、1998、各月版。

KRT 関西放送文化連盟、出版年不明、『KRT アナウンサー育成部の御案内』

KRT 関西放送文化連盟から入手。

放送芸術学院（BAC）、出版年不明、『書名不明（入学案内パンフレット）』

放送芸術学院（BAC）から入手。

放送芸術学院（BAC）、出版年不明、『書名不明（設備概要）』 放送芸術学院から入手。

水谷謙吾，出版年不明，『日本語音声学一話しことば教本』 1997.9.9. 関西放送文化連盟.
ビジュアルアーツ専門学校（大阪），出版年不明，『書名不明（学校紹介パンフレット）』
ビジュアルアーツ専門学校（大阪）から入手.

◎第1版と第2版の異同について

第2版では、第1版の誤植を訂正したほか、「研究概要」および「放送人においてレリバントなことー放送関係者養成専門学校を訪ねてー」が付加されている。

ラジオスタジオの相互行為分析

ー平成9年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第二版)ー

1998年 2月 3日 第1版発行

1998年10月17日 第2版発行

編集 榎田美雄

発行 徳島大学総合科学部人間社会学科国際社会文化研究コース
現代国際社会分野『社会調査実習報告書』刊行プロジェクト

〒770-8502

徳島県徳島市南常三島町1丁目1番地

☎(0886)56-9308 (榎田研究室)